
生きるってさあ？

knight

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生きるってさあ？

【Nコード】

N1590Y

【作者名】

knigh t

【あらすじ】

次々と襲い掛かる、不幸の大連荘。

生きる事に疲れきった主人公が、ビルの屋上で遭遇した眩しい光。神とも悪魔とも良く判らない怪しい光に呼ばれて最後の一步を踏み出した。

光を抜けて目の前に現れたのは
都会とはかけ離れた広大な大自然だった。
ありえない現象、目の前に広がる、深い森。

ここは……

やがて一人静かに動き出す。

いったい、この先に何が待ち受けているのか……

第一節（前書き）

拙い文章ですが、どうぞ宜しく願っています。

第一節

今日は20歳の誕生日。

一人、タバコに火をつけて星空を見上げた。

何十回目だろう…… またこのビルの屋上の淵に立っている。

光が見える……

だが、明らかに星ではない……
なんだ？

その光はこちらに近づくにつれ光量を増してくる。

やがて目の前は見て居られないほどに眩しく輝き
辺りは真っ白に包まれた。

あまりの眩しさに、おもわず腕をかざす。

やがて誰かが…… いや、光が語りかけて来た。

「私を信じるなら、前へ踏み出してみよ」と……

そんな台詞、どこかで聞いた事があるような？

ああ、思いだした…… あの時だ。

ずいぶん昔に友人の親に勧められて強引に連れて行かれた教会で
散々と神の話を聞かせられた事がある。

あの時に出てきた話だ。

もしかすると、目の前の話している光がそれなのか？

だが、神を見た人なんて最近では居ないはずだ。

何故か太古の記述の中では神が人の前にガンガン出て来るのだが
今の時代は人前に出てこないのが定説になっている。

あの当時、

「何故、ここに神は姿を現さないのか？」と質問する私に
「見ずして信じられる者は幸いです」などと
苦しい言い訳をしていたのを良く覚えている。
教会の牧師が言っていたのだから間違いない。

それに、たまに神を見たなんて話があっても
激しく信憑性に欠ける話ばかりだ。

目の前の光を、神だと断定するにはあまりに押しが弱すぎる。
そもそも、眩しいだけだし……

その時、また声が聞こえた。

「恐れることはない、来なさい」
いきなり、そう言われてもなあ？

全く前置きが無いし……
せめて名前くらいは名乗って欲しい……

まあ、普通なら行く事は無いだろう。

なんか、イカサマ臭いし……

それに一歩進めば硬いコンクリートへ
落下するしか道はないのだ。

しかし実際の所、もう何もかもがどうでも良かった。

それが神であろうが悪魔であろうが、もはやどうでも良い。

私はその言葉に従い、素直に前へ踏み出した。

第二節

すでに何度、死のうと思ったことか数え切れない。

これまでの間、何も楽しい事が無かった訳ではない。

だが、辛い事があまりにあまりに多すぎた。

どこが始まりなのかはすでに曖昧だが

すでに小学生の時には何もかもが歪み始めていたように思える。

私の家族は父と母、祖父母。私を合わせて5人だ。

まあ、どこにでも居そうな普通の家庭だった。

小学3年の大晦日に

父親の居眠り運転が原因で3人の歩行者を死亡させてしまった。

そして現場から逃走。

父は山中で首吊り自殺を図った。

被疑者死亡……

たぶん、ここが始まりだろう。

ここから私の転落人生がスタートを切った。

それは見事な急降下だった。

祖母が子宮ガンになり、近くの医者 of 誤診により発見が大幅に遅れ
大きい病院で発見した時はすでに他の内臓に転移。

その闘病中に祖父が心筋梗塞で入院。

何もかもに手が回らない時に、母が腹膜炎を起こして緊急入院した。

何とか母が退院した頃には、自営で営んでいた個人会社は火の車。

自転車操業でなんとか粘るも、祖母の病状が悪化し鬼のような治療
費が降りかかる。

私達の家は第三抵当にまでなり、借金の嵐。

中学の頃、

長い闘病生活の末に

祖父母が逝くの見届けると、母が一時行方不明になった。

私は借金取りしか来ない家でサバイバル生活を続けていると数ヵ月後に警察が尋ねてきた。

しかし所轄が違う警察官だ。

どうやら私の事では無いらしい……

さては、母が何かやらかしたか？

神妙に話しだす警察官の話を聞いてみると、

母が結核で入院していて、それを伝えに来たのだと言う。

だが、金の無い私は何処にも行く事が出来ないので

どうにも出来なかった。

警察官も困り果てて財布から金を出そうとするが

私はそれを静止した。

敵に塩を送られたくは無い……

私は母が居なくなつた後に

本当に困り果てて警察と区役所に相談に行った事がある。

そして警察には事件ではないからと門前払いされ、

区役所からは保護できるシステムが存在しないからと追い返されていた。

警察官は、今は状況が違うから何か方法があるはずだと言うが、私にとって警察と言う組織は、もはや恨みの対象でしかなかった。

そして世間の不条理によってサバイバル生活に追いやられて

玄関で怒鳴り続ける借金取りのヤクザ達と一悶着を起こし、

一匹狼で危ない橋も渡ってきた私は、以前の素直な心など持ち合わせてはいない。

もはや、くだらない大人共の話など聞く耳を持っていないのだ。

下手に説教などしてきたら、その愚か者に殴りかかる事間違いない。傷害事件など起こすくらいなら、端から関わらない方がマシだ。

その事情を話し丁重に断ると、
申し訳ないと謝られてしまった。
所轄が違ふ警察官個人に責任が無いだけに、
私としては非常に微妙であるのだが……
とりあえず、母には無事に生きている事を伝えてくれるそうなので
一応礼は言っておいた。

そして一年後に母が帰って来た。

中学2年も終わりに近づいていた頃である。

まあ、とうの昔に学校なんぞ行っていなかったのだが……

私は何も聞かなかったが、母がポツリポツリと話し始める。

それによると、あの日、金策の為にどこかへ向かっていたらしい。

だが、電車の中で意識を失ってしまったそうだ。

そして気が付いたのが結核病棟。

何か心当たりは無いかとを聞かれたらしいが、つい先日近く
の病院で

風邪だと診断されて帰って来たばかりだった。

ここでも誤診が発覚するが、当時は医療裁判など素人が勝てる物
ではない。

泣き寝入りが基本だったのは事実である。

ある程度進んでしまった結核の場合、外出が禁じられていて面会
謝絶。

完全に隔離されて、帰る事など到底出来ない。

家の電話は止まっていて、連絡は出来ない。

協力してくれそうな親戚も、皆無であった。

手紙は出したそうだが、私の元には届いてはいない。

その後に母が入院する病院に借金取りが押し寄せ大変な騒ぎになっ
たそうだ。

悪質な借金取りが母の行き先を探す為に郵便を盗んでいたのだろう。病院側が警察を呼んで解決したそうだった。

そんな事情で連絡を諦めかけていたそうだが、例の騒ぎの時に母の事情を聞いた警察官が心配してわざわざ私の安否確認に来てくれたそうだった。

ありがたい話ではあるが、私としては微妙な心境である……

そして、もうこの家はダメだそうだった。

すでに競売にかけられているそうで、金を返す当ても無い。

近いうちに強制退去させられるだろう。

次から次へと現れる喧しい借金取りにもいささか嫌気が差していたので

そのまま、私達は夜逃げを決行した。

生活保護でひっそりと生活していた私達親子だったが、

まだ母が若かったのが問題だった。

母目当てに出入りする男共は、それはロクな者では無い。

あそこまで男運が悪いと、もはや見事としか言いようがない。

私達の心は、さらに荒んで行った。

やがて酒浸りになってしまった母が亡くなったのが一ヶ月前の事だ。

浴びるように酒を飲む母に何度も注意を促してきたが一切聞く耳を持つてはくれなかった。

「もう、何時死んでも構わないんだよ」と笑顔で答える母は、もはやこの世に未練は無いようだった。

あの何かを悟ったような笑顔に、私は何を言えるのだろうか？

死因は脳溢血だった。あまりに突然の死だったが、
せめて苦しまずに逝けたのが何よりだ。
私は、死の寸前まで苦しんだ祖母の姿を見ている。
それが無かっただけマシだ。
これまで地獄のような人生を味わい
あそこまで苦しんで来たのだ、もういいだろう。
現状でさえ、十分に残酷物語なのだ……
全く、神も仏もあつたものではない。

そして、遂に私は天涯孤独だ。
私達家族が生きた、あの生き地獄。
絶望しか見当たらない、この世界。
何からも救われなかった、残酷な人生。
もはや私は、生きると言う行為に疲れ果てていた。
私は静かに呟いた。
それは母への問いだったのか、己への問いだったのか判らない。
「私も、もういいよね？」

落下を覚悟した私は一步踏みしめる。
その瞬間、急激な重力加速度が襲い掛かる……
はずだった……

光が、また語りかける
「さあ、私の元へ来なさい」
生きているのか死んでいるのか、もはや良く判らない。
だが、私に選択肢は無いようだ。
その言葉に従った。

光の中へ入ると、そこに別世界が広がった。
大自然と言うべきだろうか？
そんな世界だった。

第三節

これは…… 参ったな……

目の前に広がる大自然に思わず放心してしまう。
だがその時、私の中で何かがざわめいた。

これまで、かなりハードな環境だった事もあるが
この能力に気が付いたのは、ひき逃げに遭った後だ。

何か嫌な感じがする……

そう思う時は必ず何かが起きる。

その嫌な感覚を無視して、その日の予定を優先した結果が
この右足だ。

あの時に良く判った。

それまでも、その手の勘はあったのだが

あまり気にしていなかった。

だが、改めてその勘を気にして動いてみると。

危ない所で回避という現象が多々起きるようになる。

バイクで細い道を走っていた時が良い例だ。

前の信号が青だったので、そのまま進行しようとした時に
嫌な勘が全身を過った。

慌てて減速すると目の前を信号無視した車が

とんでもなく偉い勢いで通過していった。

もし、あのままの速度で走っていたら

思い切り吹っ飛ばされて死んでいたかもしれない。

生きていたとしても、かなりヤバい事態に陥っただろう。

そんな事を何度も繰り返すうちに

自然と勘に頼るような習性が付いていつて、

いつしか、この危険回避能力は私にとって無くてはならない物となっている。

その第六感が今現在、全身で大騒ぎしているのだ。それは交通事故のような一時的な危険ではない。長期に渡って命が危険に晒される事を物語っていた。

とにかくこのままでは危ない事は確か。
心を冷静に保って、今出来る事を整理した。

まず、一番にやらなければならない事は
安全に眠れる場所の確保だ。

それは雨風に耐え、尚且つ温度変化にも耐える場所であれば意味がない。

できる事なら、ある程度の防衛対策もかねた場所がいい。

これを明るいうちに確保できなければ死を意味する。

夜の野外は人が予想する以上に寒い。

そして、夜行性の獣は基本的に獰猛だ。

人間の目は闇の中では使い物にならない。

そんな時に敵を確認出来ないまま襲われれば

何の抵抗も出来ずに食い殺されるだろう。

今は、安全の確保が最優先事項なのだ。

現状、他の事は後回しにしても一向に構わない。

食事など、一週間は食べなくとも十分な体力を維持して生きていく。

最悪、水は4日以内に確保すれば何とかなる。

そして水さえ確保できれば、例えば食べ物が無くとも3ヶ月は生きていられる。

人間は、飢餓状態を超えた時に空腹を忘れる。

そして、己の脂肪を栄養源にして生きる望みを繋げるのだ。
これはサバイバル時代に実証済みである。
私は森の中を歩き出した。

その時に、何か足に違和感があった。
なんだ？

そこには、普通の右足があった。
しかし、それは私にとって異常事態。
ありえない事なのだ。

私は15歳の時にひき逃げに遭って
ゾンビのように変わり果てた右足と付き合っていた。
一時は切断を仄めかされたほど重症。
踵から指先にかけては粉碎骨折。

スネの後ろからは骨が飛び出て、大腿骨も折れていた。
折れていない骨は親指のラインの一部だけ。
右足の9割は複雑骨折の状態であった。

そして一度バラバラになってしまった骨は
元通りにはならない。

2年半は松葉杖にお世話になる日々だった。
だが3年目には激痛はある物の自分の足で立つことが出来て、一本
杖になり、

今では、意識すれば健常者に見える程度には誤魔化す事が出来る。
だが、何かと右足を引きずり気味になるのは普通の出来事。
痛みは、あれからずっと残っているのだ。
簡単に言えば身体障害者である。

だが、この中途半端な治りかたのお陰で、障害手帳を申請しても
行政は認めてくれなかった。
足が半端に機能してしまうと、重症であっても申請は通らないそう
だ。

自主的なリハビリを行った為に、基準以上の角度まで動いてしまう。粉碎して間接が存在しないはずの指は微妙に動く。足の短縮も総合計で2・5？、等級の基準は3cmからであった。激しい痛みはあっても、確実に足として機能してしまっている。どこの等級基準にも引つかからない微妙な重症。切断にならず、足が残っているだけマシなのかもしれないが……全く、この足のお陰でずいぶん嫌な思いをしたものだ。

だが、今の右足はどうだ？

何故、痛みがない？

恐る恐るジーンズを捲り上げると

そこには左足と見勘違つような普通の右足があった。

どうなっているのだ？

カクカクと動かしてみるのが、それはやはり普通の右足であった。

まあ、今は判らない事ばかりだ。

深く考えるのはやめよう。

この深い森の中、普通に動けるのはむしろ有難い。

太陽を見れば、すでにかなり傾いてきている。多分、午後二時頃だろう。

一応、携帯電話で時間を確認してみたが00:56になっている。

そう、本来なら今は深夜のはずだ。

だが、このまま悩み続けて居られる余裕は無い。

あと4時間もすれば辺りは闇に包まれる。

夜の森の中でたった一人の状況は危険以外の何物でもない。

とにかく今は急ごう。

手頃な棒を拾って覆いかぶさる植物を避けながらひたすらに進んでいった。

第四節

途中で丈夫そうな木を見つけると、

手持ちの棒と見比べて何度か交換しているうちに

硬くて真っ直ぐな良い感じの棒を見つけた。

杖にもなるし、攻撃力も高そうだ。

本当は刃物が欲しい所だが、残念な事に

いつもキーホルダーの代わりに付けているツールナイフしかない。

5?程のナイフやハサミ等を引っ張り出して使うツールである。

サバイバルグッズとして意外に有名だが、

それほど万能な物でもない。

そもそも職務質問されて最悪没収されても良いように、

100均で買った物だ。

最初は使い物にならない程に酷い商品だったが、

分解と調整をしてナイフの刃は砥石で完全に立て直した。

とりあえずは使える状態までになったが、

耐久性には相当の不安がある。

とても武器にはなりそうにない。

それでも、何も無いよりは遥かにマシで

これを持っている事で、精神的に安心感を与えてくれている。

だが、武器として考えるなら、リーチの長い木の棒の方がよほど有効なのである。

歩き続けて、一時間経った。

深い草むらを抜けると、

視線の少し上に小さめの洞窟が見える。

とりあえず、あそこを目指してみよう。

洞窟の入り口に辿りついた。

この状況で、テレビに出てくる探検隊のようにいきなり堂々として行くのはさすがに頭が悪すぎる……まずは、様子を伺ってみよう。

詳しくは判らないが、特に獰猛な気配は無いようだ。次に拾った石を奥に投げ込んでみた。

何か硬い物に当たったようだが、これと言って反応は無いようだ。さてと……

暗闇に注意しながら、静かに中に入っていく。

これ以上行くと、完全に暗闇だ……

携帯を出してライト代わりに照らして確認してみる。

奥に何かあるようだ……

確認してみると、手作りのテーブルのようなものが置いてあった。拾ってきた木で作ったようで完成度は微妙だが

それなりに良く出来ている。

その横から覗き込んでみると、奥に骨がある。

何の骨だ？

近づいて確認してみると人骨のようだ。

完全に白骨化した頭蓋骨を見ると、猿ではないと思う。

棒で突つきながら上に向けてみると

見事に見覚えのある人間の頭蓋骨であった。

ここが何処だか知らないが、人間が存在するようだ。

そしてここは、きっとこの人が使っていた場所なのだろう。だが、とりあえず骨は後回しだ。

他を見回してみる。

生き物の糞は無いようだ。

転がる残骸を見ても、他の動物が住んでいる様には見えない。それは非常に有難い事だ。

下手に動物の住処に居れば襲われる事は間違いない。

この棒一本で勝てる自信も無いので、それは避けた方が良い。ひとまず、ここは荒らされていないと考えていいだろう。

かなり良い所が見つかったものだ。
人骨に手を合わせて、黙祷する。

「落ち着いたら墓を作りますので、しばらくここに使用させてください」

第五節

さて、次は薪を集めなければいけない。

洞窟の入り口横あたりに跡があるので、ここで焚き火をしていたのだろう。

本来なら中で火を炊きたいが、通気性が悪ければ死んでしまう。それを考えての事だろう。

周囲を警戒しながら薪を集める。

森を歩きながら、他にも使えそうなものは無いか視線をめぐらせる。植物の種類も確認して回る。

薪以外に必要な物は枯葉だ。

火種に使うだけでなく、布団の代わりにもする為かなりの量が必要である。

何度も往復しながら集め続けた。

使えそうな大きな石も集めた。

かなり重いので運ぶのが大変だった。

洞窟入り口にある焚き火の跡は

上手いと思わせる。

かなり、焚き火に慣れた人の使い方だ。

しかし、これは一番簡易的な方法。

シンプルなだけに火の管理や調整も

まめに行わなければならない。

好きな人に言わせると、そこが良いらしいのだが……

まあ、それでも構わないのだが、

先程から少し風が強くなってきたので、このままでは不安要素がある。

もし雨でも降って来れば、そこは水浸しだ。
雨風の対策も加味して、私は石を集めたのである。
焚き火の跡を囲むように石を積み上げる。
まず地面からは完全に浮かせた状態にして、
水が溜まらない様に流れ道を作りがなら石を積んでいく。
そして、その上に二段になるように石を重ねた。
屋根が無いので雨は確実に薪に掛かるが、
水が溜まらなければ何とかなるはずだ。
これでダメなら、また対策を考えよう。
下の段に枯葉を放り込み、上に太い木を積み重ねる。
そしてライターで枯葉に火を付けた。

このライターも何時まで持つだろうか？
今は大事に使うしか無いが、いずれ他の方法も考えなければなるまい。

枯葉の乾燥の状態はなかなか良好で、すぐに火が大きくなっていく。
そしてその火が真上に上がると、木材に連鎖していく。
何とか成功だ。
簡単に煙突構造を利用したものが、
これの方が圧倒的に火が付きやすい。
そして風にも強いのが利点だ。
あとは木材の量で火を調節するだけだ。
肌寒くなってきた気温の中で、炎の温もりが染み渡る。
小高い洞窟から、少し見渡せる森を眺めた。
思わず軽い溜め息が漏れる。
さて、これからどうしたものか……

第六節

火が安定してきたので、寝る場所を作り始める。

今日は掛けるものが無いので、枯葉の中に潜って寝るしかない。しかし、そうそう寝ても居られないだろう。

夜は何が襲ってくるか判らないのだ。

この炎でだいぶ予防線は張れると思うが、安心は出来ない。

今夜は、寝ては起きての繰り返しになるだろう。

まあ、こればかりは仕方が無い。

これから深夜にかけて温度は下がり続けるだろう。

もし、限界を超えた寒さの中で寝ていては危険だ。

人間は不思議な事に、限界以上の暑さの中では自然と目が覚める。

だが、極限の寒さの中では眠気の方が勝るのだ。

寝たまま凍死してしまうのは、この現象によるものである。

睡眠中に体温が下がりすぎて、死んでしまったら元も子もない。

そして夜行性の獣は、暗くなって速攻で動き出すわけではなからう。

かえって深夜になる程に危険は増して行くはずだ。

ここは今のうちに寝ておくのが得策だろう。

この先が見えない状況で、体力温存は必須である。

できるだけ寝てしまおう……

何かの遠吠えで目が覚めた。

慌てて焚き火を確認すると、まだ順調に燃えているようだ。

火の付いた薪を一本取り出し、暗闇に掲げて慎重に周囲を探る。

獣の気配は無いようだ……

とりあえず一安心である。

体が勝手に身震いする。

かなり冷えてきているようだ……

焚き火に近づいて、急いで身体を暖めた。

こういう時は、家という物の偉大さをひしひしと感じる。

火の調節をしながら改めて森を見渡すと、恐ろしい程に何も見えない。

昼間の緑に覆われた優しい森の雰囲気は嘘のようだ。

灯りは目の前の炎だけ、これほど見事な闇は久しぶりの体験だ。

何気に空を見上げれば、そこには今まで見た事が無いような星空が展開していた。

これは、凄い……

星に手が届きそうだとはい、この事を言うのだろう。

見つめていると、空との距離感がどんどん狂っていく。

あまりに星が多すぎて、何がどうなっているのか良く判らない。

この迫力の前では、百万ドルの夜景など子供騙しでしかないだろう。

これは、もはや何にも例えようが無い。

こんな光景は、都会では絶対にお目にかかれない。

その時、何故か星が滲む……

なんだ？

慌てて確認すると、自分の頬に涙が流れているのが判った。

私としては泣いているつもり全く無いし、

都会が恋しい訳でもない。

まして、今の状況に絶望している訳でもない。

だが、思い当たる事はある。

私は今、この目の前に広がる大自然に癒されている。

そして、宝石箱のような星空に癒されているのだ。

まるで、心が洗い流されていくような不思議な感覚。

不条理、わだかまり、屈辱、絶望。

憎悪に塗れた魂の叫びが浄化されていく……

今この瞬間、圧倒的な自然の美しさが

私の全てを包み込んでいた。
たった一人、深い闇の中で私の涙は止まる事がなかった。

第七節

夜空が白み始めて、やがて静かに朝日が森を照らして行く。
鳥の鳴き声が耳に心地よい。

夜が明けるとともに炎の勢いを落としていった暖炉は
なかなか良い感じに炭になっている。

まだ少し燻っているが、あえてこのまま放置する。

これが消し炭のようになり、次の点火が楽になるのだ。
さて、水を探しに行くか……

まずは洞窟の横から少し高台に登り、森を見渡してみる。
右の方に木が少ない部分を見つけた。

森に線を引いたような状態である。

多分、あそこに川があるはずだ。

距離も大した事はなさそうだ。

まずは向かってみよう。

森を抜けて行くと、水音が聞こえてくる。

やがて開けた視界に川が見えた。

小さめだが、とても綺麗な川である。

下流の方では、鹿のような動物が水を飲んでいた。
足場を確認しながら慎重に川原へと降りていく。

水際まで来るとさらに慎重に水の状態を見える。

とりあえず鹿が飲んでいいるのだから人間も飲める可能性は高い。
だが、まだ素直に安心は出来ない。

この川自体が何かに汚染されている可能性もあるのだ。
しかし水質検査ができるような素材は持っていない。

煮沸すればすぐにでも飲めそうな雰囲気だが、今は鍋が無い。
その材料に出来そうな物もまだ見つからない。

昨日の今日だ、こればかりは仕方が無い……

私は水を手ですくい上げ、少しだけ唇を湿らせた。
今日の水分補給はここまで。

もし危ない菌が居れば、これだけでも十分に危険だ。
発熱や下痢などの症状が出るだろう。

運が悪ければ死ぬかもしれない。

だが、これで明日になって問題が出なければ、
そのまま飲める水である確立が跳ね上がるのだ。

3日ほど掛けて摂取量を増やして行く予定である。

良く見ると、ちらほらと川の中に魚影が見える。

なんとか捕獲したいが、さすがに手掴みは厳しいだろう……
これも方法を考えなければいけない。

川原の石を静かに持ち上げてみる。そして、もう1つ。また1つ。
5個目の石を持ち上げると、やはり居た……
沢蟹である。

すばやく逃げようとするが、石で頭を叩いた。

本当は生け捕りが望ましいのだが、今は捕まえても入れる物が無い。
そして、せっかく見つけた食料に逃げられては困る。

蟹には申し訳ないが静かになってもらうしかなかった。

とりあえず5匹捕まえて洞窟へ戻る。

まだ燻っている薪の中に蟹を放り込んだ。

消え欠けと言っても、火力はまだ十分に残っている。

黒っぽい体が徐々に赤くなってくると、

香ばしい臭いが立ち込めて来た。

本来は油で揚げたい所だが、残念ながら今は丸焼きにしか出来ない。
比較的、川の蟹は甲羅が柔らかい。

何とか食べる事が出来るだろう。

しっかりと焼きあがった蟹を食べてみる……

うん…… なかなか美味い。

さすが蟹だけの事はある。

だが、比較的柔らかいと言ってもやはり甲羅。

丸ごと食べるには、さすがに硬かった……

仕方が無いので、歯で分解しつつ中身を食べた。

とりあえず、緊急時の食料を確保できただけでも良しとしよう。

緊急時の食料と言えば、

昆虫や幼虫と言った選択肢も

あるには…… あるのだが……

いや…… それは、辞めておこう……

それこそ、究極の選択に迫られなければ口に入れようとは思わない

……

第八節

森の中を、植物の選定をしながら歩き回ってみる。
薪や枯葉もまだまだ必要になる。
往復しつつ地道に集めていった。

長めで真っ直ぐな木の棒を用意する。

まずは防衛対策が必要だ。

棒の先をツールナイフで徐々に削って行く。

ナイフに負荷を掛けて壊しては元も子もない。

軽く、地道に削っていった。

2時間半ほど掛けて二本の木の槍が完成した。

一本は太めで短目の防衛用。

もう一本は細くて鋭く、そして長くした魚取り用だ。

水の抵抗と射程距離を考えて、この形にしてみた。

さっそく実践に向かってみる。

静かに水際へと近づいて槍を突いてみるが

すり抜けるように逃げられてしまう。

なかなか一筋縄には行かないものだ。

その時、岩場の影でジツとしている魚が横目に入ってきた。

気付かれないように、そして素早く槍を突く。

お…… 当たった……

魚は、かなり暴れている。

このまま引き上げれば逃げられてしまいそうだ。

槍を押さえながら、片手で靴を脱いで軽く後ろに投げる。

靴下も脱いで靴の方向に投げた。

シーンスを膝まで捲り上げる。

おもむろに水の中に入っていった、槍を垂直に立てる。

力の入る所までくると、そのまま槍を水の底に押し付けた。
2度、3度と力を込めると魚の動きが静かになった。

片手を水に突っ込んで槍の先端を確認すると、しっかりと刺さっているようだ。

その先端を持ちながら水から引き上げると

槍に貫通した魚がグツタリとしていた。

何とか小物を一匹確保できたが、これはしばらく課題になりそうだ。
魚を逃がさないように上手く射程距離まで近づく方法を
編み出さなければいけない。

川原に魚を置き、エラの奥にツールナイフを突き刺す。
ビクっ！と動いて魚は静かになった。

ちよつと可哀想だが、すでに食料になってもらう事は確定している。
躊躇無く、脊髄を切断させてもらった。

次に尻尾の付近に切り目をつけて、水の中に魚の頭を沈めながら左右に動かした。

魚から溢れ出した血で手元の水が赤くなる。

しばらく動かしていると血も少なくなっていく。

このサイズなら血抜きはしなくても良いかもしれないが、
調理法が丸焼きしか出来ない。

最低限の臭みは消しておきたい。

次に魚を洗って、腹をツールナイフで切っていく。

内蔵とエラを指で掻き出した。

焼いてしまえば丸ごと食べる事は出来るだろうが、
もし、内蔵に何かが寄生していたら危険すぎる。

これは排除しておいた方が無難だろう。
生の内蔵の柔らかい感触が指に伝わる。

まあ、気持ちの良いものではないな……

売り物のような姿になった魚を洞窟に持ち帰った。

暖炉の炭を薪で突付きながら少し並べなおして平らになるように調整する。

その中に、手の平程の大きさがある

若干波打った平らな石を素早く置いてみた。

素手であつても瞬間ならば火傷はしない。

まあ、それでも十分に熱いのだが……

分厚い手袋か、トングのような長い道具が欲しい所である。

木で突付いてみると、置いた石は安定しているようだ。

まあ、何とかなりそうだ。

石が熱くなつたのを確認して魚を置いてみた。

「ジュっ！」と蒸発するような音が響く。

今は串になりそうな木が無い。

箸の代わりになりそうな物は用意したが

串を作るには、全く適していない。

集めた木は適度に乾燥していて、火には滅法弱そうだ。

長い時間を炎に晒されれば、あっさり燃え尽きて

暖炉の中で燃える炭のようになってしまふだろう。

そしてその中に落ちてしまったら、せつかくの食料が汚れてしまふし

熱い炎の中に、手を入れて回収するのは至難の業だ。

ここは、やはり石焼が無難だろう。

これで上手く焼けてくれると良いが……

やがてパチパチと音がしてきた。

どうやら、焼けてきているようだ。

箸で魚をひっくり返してみると綺麗とは言えないが焼き目が付いている。

焼き上がるのを見届けると、拾つてあつた厚めの葉の上に移動した。

植物の葉が皿代わりなので少し悲しいが、贅沢と言える状況ではない。

多分、焼けてるよな……

ツンツン突付いてから、魚を解してみると中は白くなっていて身が簡単に剥がれた。

おもむろに、食べてみた……

「っ！……」

おもわず、声にならない声を上げてしまう。

美味い…… 美味すぎる……

塩気は全然無いが、そんな事は関係無いくらいに美味い。

さすがは取れたて……

いや、私が空腹なだけなのだろう……

まあ、そんな事はどうでも良い。

私は夢中で魚に喰らい付いた。

第九節

さて、これからの狩りに向けて考えなければなるまい。

魚が食べられるようになって一安心だが、

これから、それだけと言うのも厳しいだろう。

下手をすれば、川の魚を取り尽くすことになってしまう。

先の事を考えても、それだけは避けたい。

食料として、他の動物も視野に入れなければならないだろう。

はたして、どういったものが使えるだろうか？

動物に向かつて漠然と石を投げるだけでは、あまりに原始的過ぎる。

それにある程度の重さの石を投げてみると、相当の負荷を感じる。

これでは、いずれ肩を壊しそうだ……

だが、これと言った材料が無い今は洒落た物が作れないのが現実だ。

何しろ、自然の物から作りださなければならぬ。

かなり、レトロな武器に頼らざるを得ないだろう。

今は、少しでも多くの材料を集めるのが最善に違いない。

とりあえず紐やロープは必要だろう。

植物の蔓は、前に見つけておいた。

それが材料になるか実験してみる必要がある。

私は、その場所に向かった。

蔓を適当に引っ張ってみると、なかなか丈夫だ。

これを解したら細い糸のようになるだろうか？

ある程度集めると、洞窟に持ち帰ってみた。

慎重に解していくと、かなり丈夫な繊維になった。

手で引っ張っても簡単に切れる事は無い。

これは、中々良さそうだ……

次に、川原で見つけておいた艶のある平たい石を持ってくる。形が手頃で適度な薄さ。そして割れが無いツルツルとした石。こういうサイズを見つければ意外に苦勞するのだ。

薪を拾うときに見つけておいた手頃な木の棒に、石を紐で何重にも縛りつけた。

かなり不恰好ではあるが、石斧の完成だ。

原始的な雰囲気は何とも言えないが……

まあ、即席にしては上等だろう。

完成した石斧と木の槍を持って川原へと向かった。

先日目に付けておいた大きな岩の前で座り込む。

さて、地味な作業になるな……

相当にザラついた岩の表面に、石斧を擦り付けて行く。

辺りには異様な音が響き続けていた。

汗だくになりながら、約二時間の間ひたすらに擦り付けた。

石は徐々に削られて、そこに刃が立って来る。

最後は川の水で濡らしながら仕上げを行った。

決して鋭い刃では無いが、斧としてはこれで十分だろう。

私はその場に崩れるように座り込んだ。

あまり量を食べていない状況で、この作業はハード過ぎる。

さすがに疲れた……

喉に渴きを覚えたので、木の槍を持ち水辺へと向かう。

水を手ですくって、ほんの少しだけ口に含む。

今の所、川の水を飲んで身体に悪い症状は出ていない。

この水は普通に飲めそうだと確信に近づいているものの、

まだ必要以上の量を摂取しないように気をつけた。

「そこだっ！」

水面に向かい、木の槍が飛ぶ。

着水した槍は、そのまま倒れずに左右に妙な動きを続けている。

靴と靴下を置いて川の中に入り、フワフワしている槍を手にした。

一気に槍を地中深く突き刺してから引き上げれば、そこには魚が深く刺さっていた。

うん…… これは、なかなかのサイズだ。

この手の魚取りで、目に見えるチャンスはなかなか訪れないものだ。逃げ場の無い岩場の間で、魚は完全に油断していたようだ。

その岩の影にも助けられ、水の中が良く見えた。

今日はかなりラッキーと言って良いだろう。

ツールナイフで魚をさばき、内蔵を処理しながら呟く。

「今日は、良い夕食が出来そうだ……」

荷物をまとめて、私は早急に洞窟に戻った。

ひとまず、製作した斧の実験だけはしておこう。

太目の薪に斧を振り下ろすと

刃がストンと木に食い込んだ。斧の刃先に木をつけたまま地面に叩き付けると

薪は綺麗に割れた。

うん、これなら何とか使えそうだ……

石を木に縛ってあるだけなので、重量が片側に寄ってしまい

バランスは良いとは言えないが

癖さえ判れば十分使える範囲だ。

これから宜しく頼むぞ……

そんな言葉を掛けながら、不恰好な石斧を撫でた。

今回は丈夫な紐が手に入った。

いずれこの紐を利用して他にも実験したいが、今日はもう気力が無い。

さっさと食べて寝る準備をしよう。

第十節

今日は、川と反対側の地域を探索中である。

しばらく森を歩いて行くと、見慣れた木が落ちている。

これは……

どう見ても竹のようだ。

もしや、近くに竹林があるのか？

もしこれが存在するなら、ぜひとも手に入りたい。

この状況で、竹ほど頼りになる存在は無い。

辺りを慎重に探索すると急斜面の上に竹林が見えた。

ここから直接は登れないようだ……

回りこむようにそこに近づくと、かなりの量の竹が生えていた。

細い物もあれば立派に成長して太い物もある。

これは本当にありがたい。

さっそく石斧を取りに戻って、採取を始める。

木こりの様に生木に斧を当て数本倒して行くが、

横たわった竹でも使えそうなものは沢山ある。

色々な太さの竹を洞窟に持ち帰った。

まずは、竹槍を作ろうと思う。

やはり防御は欠かせない。

ちなみに竹槍で一番に浮かぶのは、大戦時代の日本だろう。

古い資料の中に、女性が整列して

竹槍の訓練をしている画像を何回か見た事がある。

だが、不思議な事にその槍はやたらに太い。

あれでは明らかにオーバーサイズで

特に、女性には無理がありすぎる。

まあ、突きをしている所しか見た事が無いので

一撃に全てを賭けているのだろう。

重ければ確かに威力はあるだろうが、的を外せば間違いなくよろけるだろう。

その隙を補おうと足掻いても足元がふら付いてしまって、どう頑張っても隙だらけだ。

一発勝負しか出来ないのは現実的ではない。

実践では、お話にならないだろう。

私は少し細めの竹を選んだ。

竹刀の握りよりは太めだろうか？

このくらいの方が、小回りが効いて都合が良い。

斜めに加工するのは意外に苦戦した。

ノコギリが無いのがかなり厳しい。

細くて目の粗い石を探してきて、それをノコの代わりにした。

一気に切斷できないので、周りに線を付けていくように

徐々に擦っていった、弱くなった所を石斧で割るような感じで整形した。

最初は上手く行かなくて二本も割ってしまった。

まあ、その竹は他の用途に使う事にしよう。

切断面が粗いので、川原の砥石で慣らして

ツールナイフで最終仕上げをした。

なんとか形になって良かった……

野外用に長めの物を2本と、

洞窟内で使えるように短めの物3本作った。

短いといっても1メートルは超えている。

まあ、簡単に言えば枕槍だが、あまりに短いと、槍の利点は発揮されない。それは、さすがに考え物である。

とりあえず軽く振ってみよう。

まずは長い槍からだ。

竹槍を持って、おもむろに洞窟の外へ出た。

ちなみに私は、道場で武道を習った事は無い。

だが、自主的な打ち込みなどは日頃から行っていた。

完全に独学であるが……

それでも剣道経験のある友人に、冷や汗を欠かせるくらいは十分に出来た。

今となつては懐かしい話だが、それをするには訳がある。

友人の剣はあくまで剣道。その打ち込みは鋭いが、基本は当てるのが目的。

どちらかというと、スポーツの要素が強い。

だが、私が独学で覚えたのは剣術である。

居合いと斬撃が織り交ざったような感じだ。

竹刀での手合わせであったが、私は相手を叩き切るつもりで打ち込んでいく。

上段から繰り出すのは剣道の面ではない。

これまで彼が見た事も無いであろう、渾身の袈裟懸け。

一歩下がって回避するが、相手の耳元で風切り音を唸らせて竹刀が通過する。

その勢いのまま正眼に構えた彼の竹刀を腕ごと弾き飛ばした。

段違いな威力に青ざめた友人の動きには、もはや切れが無くなっていた。

気迫で押された時点で、すでに勝負はついている。

一見、隙だらけに思える私に気付いて

彼は慌てて面を取りに来るが、時すでに遅し……

さらに踏み込み逆袈裟斬りが唸りを上げる。

「必殺、ツバメ返しもどき！」

竹刀が彼の胴へと食い込み、その体重諸共強引に跳ね上げた。

これ、まさに殺人剣。

威力が少ない竹刀の一撃でさえ、友人は唸り声を上げて座り込んでしまった。

実は足への攻撃もあって試してみたかったのだが、

「剣道のルールが崩壊する」と主張されて禁じ手にされてしまった。

「薙刀には足払いがある。実戦を想定し備えるべきだ」と言い返してみたが、

彼の頭には、異なる武具と対戦すると言った発想は存在しないようだ。

非常に残念である……

しかし、あの一撃を撃ち込んで以来、

「殺す気が……」と言われて

私を避けるようになってしまったのは確かなのだが……

色々と独学が好きな私は、当然槍の打ち込みも行っていた。

どう転んでも基本は突きなのだが、

少しでも小回りが効くように

棒術を合わせたような中国拳法の動きを参考にした。

戦いの中で、槍のリーチは明らかに有利である。

他の武具よりも多く振っていたので、槍は比較的に得意な方だった。

さっそく突いてみると、なかなか良い感じだ。

次に振り回してみる。

風を切る音が凄い……

外周に遠心力が加わり、先端はかなりの速度が出ているようだ。だが、その長さ故に狭いところでは厳しくなる。

やはり外でしか使えそうに無いな……

次は短い竹槍に持ち替えてみる。

やはり短いだけに射程は下がる。

しかし、取り回し速度が速い分、先端の速度はさほど劣っていない。
これは意外だった。

振り回すほどに、実感が湧いてくる。

こっちの方が、使いやすいかもしれない……

もしかすると短い方がメインの武器になりそうだ。

さて、次の物を作ろう。

竹を節の所で切断を試みる。

これは大変だ……

さすがに一番、硬い場所である。

だが、割れてしまつては意味が無い。

深い傷をつけるように地道に削つて切断した。

一箇所竹の節を残す事でコップ代わりになる。

これも何かの時の為に、予備も作つた。

太い竹を使つて、バケツ代わりになるものも作つた。

何やら節の中が汚れているので、後で洗いに行こう。

なんとか6箇所の切断が終わつたが、

さすがに結構疲れてきた……

だが、まだ作りたいものがあつた。

使い捨てになるが、竹は火にかけることも可能だ。
一個辺りの大きさは確かに小さいが、鍋が無い今

これは本当に貴重な素材である。
かなりの疲労があるが、力を振り絞って
形の違う物をいくつか作った。
これは、これから必需品となるだろう。
遂に、念願の水の煮沸が可能になるのだ。

さらに工夫すれば、食べ物を煮る事だって出来る。
蒸し焼きだって出来る。

生のままではキツイ臭いを放つ植物も
簡単な調理が可能になる。

それ以外にも、応用はいくらでも利くだろう。

これは偉大なる進歩である。

今は小さな一歩であるが……

いや、やめておこう……

そこまで大げさな話ではない。

第十一節

尖らせた石で、大きめの木に目印の数字を刻みながら思わず呟く。

「少し息が切れてきたな…… 一気に歩いたのが効いたか……」

今日は少し気合を入れて、遠征を試みている。

もう、だいぶ距離を歩いてきた所だ。

かれこれ2時間は歩いているだろうか？

何か違う物があるだろうと期待していたのだが、

森の景色はそうそう変わってはくれないものだ。

いくら歩けども、ひたすら森と言うのは心が挫ける……

どこかで休憩を入れよう。

その時に、妙に足が重く感じた。

なんだ？

見ると靴に土がこびりついている。

うつ…… まさか、獣の糞か？

いや…… 臭いは…… 無いな……

少なくとも、糞では無いようだ。

臭いがこびり付いたらたまった物ではない。

私は胸をなでおろした。

良く見てみると、どうやらこの一帯が同じような感じだ。

明らかに、土の質が違う。

しかし、なんだ？ この異常な粘り気は……

指で少し取り上げて見ると、赤茶色の激しくネバついた土である。

これは、もしか……

私は、森を見渡す。

大きな葉でもあれば良いのだが……

その時、左の方にやたらと緑の多い木が見えた。

それに近づいてみると、かなり大きい葉がぶら下がっている。笹を巨大化したような縦長で相当に分厚い。

触ってみると、かなり丈夫そうだ。

裏を見ても、粉などは噴いていないので毒は無さそうだ。

これ、使えそうだな……

5枚ほど刈り取ると星型のように広げた。

腕の先を大きい葉ですっぽりと包むと

赤茶色の土を掻き集める。

葉の上にある程度盛って土を包み込んだら

葉の芯で縛り上げた。

見た感じは、巨大なチマキと言った所だ。

まあインスタントのバッグにしては良く出来た方だろう。

それを持ち上げてみると結構重い。

これを持って、また2時間か……

その距離にゲツソリしながらも帰路に就いた。

休憩を挟みながら、ようやく洞窟に辿り着いた。

もはや汗だくだ。

もう、どうにもならないくらいに疲れている……

しかし、それでも私は何かワクワクしていた。

川に行って手と靴を洗い、顔を洗ってリフレッシュする。

竹のバケツで水を汲んできて、その土をいじり倒した。

うん…… やはりそうか……

これは粘土だ。

かなり純粋な粘土質の層が剥き出しになっていたのだろう。

これは、使えるぞ……

私は、水辺の目の細かい綺麗な砂を持ってきて

その粘土に混ぜ合わすと、いくつも形にして洞窟の奥に放置した。

時間は掛かるが、後の楽しみだ。

第十二節

私は、空を飛んで行く鳥を見つめて呟いた。

「ああ…… 鳥肉が食べたい……」

以前は鳥を見ても食べたとは思わなかったのだが、

簡単に物が買えない状態が長く続くと

生き物が美味そうに見えてくるのは不思議だ。

しかし飛んでいく姿を見ると、とても捕まえられる気がしない。

罠を作ると言っても、まだ大した道具も無ければ、誘う餌も無い。

うーん…… かなり無理がありそうだ……

では、こちらから仕掛けなければなるまい。

だが、石を投げても当たる気がしない。

ならば、アレはどうだ？

私は、5？ほどの丸い石を2つ拾ってきた。

次に細い紐を1メートルほど3つ編みにしてみた。

作った紐の両側に石を外れないように慎重に結び付けていく。

しっかりと縛り付けたら完成だ。

この通称はソマイ。

俗に言う、アメリカカンクラッカーのような物だ。

紐の両先に石を縛り付けただけの簡単な物だが、間違いなく狩猟道具である。

さっそく実践へ向けて試してみよう。

投げる度に、溜め息の深さが増してくる。

頭の上で振り回して、的に向かって投げる。

すると、ソマイは広がりながら飛んで行って標的に絡みつく。

理屈はそうだ、確かにそうだ。

それは、良く判っている。

しかし、なんだ？ この難易度は……

狙った的に、全く向かってくれない道具を見つめて、また溜め息が出る。

難しいな…… これ……

すでに30投ほどしているが、右へ左へと2メートル近く外れているのだ。

このままでは鳥を捕まえるなど夢のような話だ。

しかし鳥肉の為だ…… ひたすら練習しかないか……

深い溜め息をつきながら投げ続けた。

そろそろ150投目に突入しただろうか？

ソマイが狙った木に絡みついた。

おお……

すでに疲れ果てていて全くコメントは出ないが、少なからず感動はしている。

何とか力加減と、離すタイミングを掴んだようだ。

それからは大きく外す事は無く、順調に集弾率が上がっていった。

これなら使えるかもしれない……

かなり疲労に、思わず座り込んでしまう。

だが、まだ辞める訳にはいかない。

激しくハードではあるが、この感覚を忘れないうちに実践だ。

狙いは小鳥の集団。

小物を狙う場合、一羽必中にこだわるよりも集団に投げ込む方が効果的である。

とにかく当たりさえすれば何とかなるはずだ。

大きな木に集まる大群を見つけた。
かなりの数だ。

さて……ここからが問題だ。
大きく深呼吸をして一連の行動をシュミレーションする。
しかし、考えてはいけない……
ひたすらに、己の感情を押し殺す。
私は、ロボットのように手順をこなすだけで良い。
そう、何も考えてはいけないのだ。
私は、その場で目を閉じた……
周りの音が、徐々に消えて行く……
やがて心のスイッチが切り替わる。
静かに見開いた眼が、冷やかにターゲットを見据えた。

なるべく気配を消して、射程距離まで静かに近づいていく。
まあ奴等は遠投武器への警戒心が無い故に、普通に近づいても逃げないのだが念の為だ。
万が一に、一羽が動くと一斉に飛び立ってしまう。
そして、唯一の狙いはその飛び立つ瞬間だ。

頭の上でソマイを回し始める。
3回転の間に十分な加速を付けると風切音が聞こえてくる。
そして4回転目、集団に目掛けて発射した。

小鳥は一斉に羽ばたいて飛び立つ。
私は急いで回収に向かった。
いた……

二羽の小鳥がソマイに巻き付いている。
素早くツールナイフを取り出して、渾身の力を込めて喉元を一気に切り裂く。

今は、何も考えてはいけない……
ここで躊躇しては、無駄な苦痛を与えてしまう。

今出来る事は、即死させることだけ……

絶命を確認すると、ふと我に返った。

手が震えている……

しかし、まだ感傷に浸るのは早い。

ソマイを鳥の足に巻きつけて逆さにぶら下げながら川へと直行した。道中、状態を見ていたが、さほど血は出ていないようだ。

まあ、これほど小さい鳥ならば血抜きの手も無いだろう。

川に付くと、震えた手で二羽を並べて手を合わせる。

何の意味も無いかもしれないが、それをやらずには居られない。

黙祷を済ませると、おもむろに鳥の毛を筆り始めた。

まだ、暖かい……

恐ろしいほどの、罪悪感が私を襲う。

私は、思わず呟いた。

「久々だと、さすがにキツイな……」

あのサバイバル時代……

空前の食糧難に陥った私は、鳩や雀を食べて生を繋いだ。

武器はスリングショット、弾は釣り用の重りを使った。

あの時の衝撃は、未だに忘れる事が出来ない。

私は、基本的に動物が大好きだ。

ハムスターに始まり、鳥や犬に猫と色々飼った経験がある。

そしてペットが寿命を迎えれば、いつも底知れない悲しみに襲われた。

命は大事な物だ、それを奪う事など考えられない。

ずっと、そう思ってきた。

まあ、比較的に普通の考えだと思う。

だが、その常識が一気にひっくり返ったのがあの時代だ。

まだ中学生だった私には、それは辛い作業だった。

生暖かい肌、溢れ出る内蔵。そして滴る血液。

体中が震え、涙と吐き気が交互に襲う。

そして焚き火で焼いている間も、食べている間も

溢れる涙は止まる事が無かった。

昔の人々は普通にやっていた事、しかし都会では異常事態だ。

それを素直に受け入れる器など持ち合わせていなかった。

今思えば私の心はあの時、完全に壊れてしまったのかもしれない。

もう、二度とあんな事は無いだろうと思っていたが

まさか、また経験する羽目になるとは……

鳥もさばき終わり、洞窟へと持ち帰り火で炙る。

まずは残りの毛を焼いてしまわなければいけない。

調理はその後だ。

毛がパチパチと音を立てて焼けていく。

それを汲んできた水で洗い流した。

これでようやく食べられる状態になる。

気が付けば辺りはすっかり夕暮れだ。

ずいぶんと時間をかけてしまった。

肉を焼いているうちに、いつしか闇に包まれた。

今日は、この一食だけか……

まあ、念願の鳥が食べられるのだ。これ以上を望むのは贅沢である。
う。

焼きあがった鳥を食べてみた。

うん、さすがに美味い……

ニワトリに比べれば若干のクセはあるが、問題にならないレベルだ。塩が欲しい所だが、肉の味だけでも何とかなるものだ。

私は少ない食材を、しみじみと味わっていた。

満天の星を見上げて、思いにふけりながら

また1つ、溜め息がこぼれる。

しかし、不思議なものだ……

私はこの状況になる直前まで、自ら命を断とうとしていた。ほんの数日前まで居た便利な世界。

あらゆる物が溢れ、夜は闇が無く、人工物に囲まれた世界。生きると言っただけに閉じ込められて、何のリスクも無く存在している世界。

そんな楽であるはずの環境で、生きる氣力を失くしていた。だが、今はどうだ？

この誰も居ない世界、そして危険極まりないであろう環境。その中で、今この瞬間も生きて行こうとしている。

私は、なんと矛盾している生き物だろうか……

しかし、どういう訳だか今の方が生きている氣がするのだ。

死の影が脳裏を過ぎる度に、確固たる実感が沸いてくるのだ。要らないサバイバー根性に火が付いているのだろうか？

真のサバイバーの代表格と言えば、遊牧民とネイティブアメリカンだろう。

他にも知られていない素晴らしい部族は無数に存在する。

彼等は凄い。いや、凄すぎる。

私など到底足元にも及ばない。

だが、どの部族にも共通して言える事は自然と上手に共存している事だ。

彼等は、文明に頼ることは無い。

先祖代々、大切に語り継がれて来た技を駆使してとても静かに、そしてしっかりと根付き生きている。

彼等は大自然を味方につけ、常に感謝の心を絶やさない。

己は小さい存在だとへりくだり、大地の神に祈る。

それが、真のサバイバーの姿だ。

私は、それが生きているという事だと心底思う。

都会に居る時には、麻痺してしまう感覚こそが

一番大事なことなのだ。

私が行っている事は、興味本位で調べた真似事に過ぎないが、今この瞬間にも彼等の知識が役に立っている。

そして、それ等を知る事が無ければ今頃は只途方にくれていただろう。

本来、彼等が自然に行っている事こそが

生きているという事だったはず。

いつしか文明が栄え、自然を破壊し

我等人間がこの世で一番の存在だと思い込み

大量破壊兵器を手に余るほどに生産し、同じ人間が住む敵国を威嚇する。

街で暮らす市民は、便利すぎる日常で神経が麻痺し
いつしか大切な事が刷り変えられていく。

そして世界は、金が全ての世の中……

何が大切かは、人それぞれだと言うが

本当にそうだろうか？

基本的な事は、実は一緒なのではなからうか？

そんな疑問が私の中で育っていった……

物がありふれた世界では、見つけられない大切な事。

私は、それを静かに噛み締めていた。

第十三節

森で、野ウサギに遭遇してソマイで確保した。

恨みは無い…… すまん……

いつもながら、動物の命を絶つ時は罪悪感に苛まれる。

生きる為だと己に言い聞かすが、

見た目が可愛いだけに余計辛い。

だが、これは肉の中でも相当に美味しい部類のはずだ。

私は美味しい肉が食べたかったのだ。

こればかりはどうにもできない。

川原で黙禱を捧げて、もくもくと捌いた。

焼きあがった肉を食べてみる。

おお…… ケセが… 無い……

豚肉のような鳥の肉のような不思議な感覚だ。

やはり、ウサギは素晴らしい。

満腹になるには、ちよつと少ない気もするが……

だからと言って、何羽も狩る気にはならない。

まあ、小鳥よりは明らかに多いので良しとしよう。

先程から、どうも雲行きが変だ。

森の臭いも、いつもと違う。

湿気を含んだような、独特な臭い。

こんな日は、かなりの大雨になる可能性がある。

もし想定を超えた雨が振ったなら、暖炉が消えてしまう恐れがある。

乾けばまた使えるだろうが、復活まで何日掛かるか判らない。

さて、どうした物か……

私は川原へ石を集めに行った。

足りるであろう数になるまで5往復かった。

洞窟の上を見ながら雨が掛からないであろう位置に積み重ねる。

大きな葉を天井に何枚か組んで、煙が外に出るように配置する。

そこに暖炉の炭を持って来て、その上に薪を積み重ねる。

しばらく煙の様子を伺っていたが、この流れ方なら大丈夫だろう。

少なくとも、死ぬ事は無いはずだ。

これで小型の暖炉が完成だ。

メインの暖炉の勢いを落として行く間に、大き目の石を拾ってきた。

平らな石が欲しかったのだが、そんな板のような石はさすがに無かった。

それでも、意外に薄めの石があったのでそれを暖炉の上に置く。

これが蓋代わりだ。

もし大雨が降っても被害は少ないだろう。

作業が一段落した時には、もう空はかなり暗くなっていた。

これは、本格的に来そうだな……

動けるのは、今のうちかな？

私は川原で3匹の魚を確保して戻ってきた。

さばいた魚を竹で作った串で刺し

メインの暖炉に蓋をした石に挟み込んだ。

これで一時間も置いておけば、スモークもどきが出来るはずだ。

すっかり作られた燻製には程遠いが、生のままよりも良いだろう。

燻し終わった魚を引き上げると、ぽつぽつと降り出してきた。空の様子を伺っていると驚くほどに雨足は速く、すぐに本降りになっってしまった。

森は灰色に染まり、曇りガラスのように霞んでいる。
聞こえてくるのは雨の音だけ。

これは凄いな……

夕立のように激しい雨は、ひたすらに降り続いていた。
小型暖炉の火を調整しながら、溜め息を付く。

ちよつと予測が甘かったかな……

さすがに、ここまで勢い良く振るとは思っていなかった。

これでは雨が上がっても、すぐには動けそうに無い。

ぬかるんだ土に足元を取られたら危険だ。

崖から転落でもすれば、お陀仏である。

ここでは誰も助けてはくれない。

まずは、安全第一だ。

ひとまず3匹の魚と、煮沸済みの水で凌ぐしかない。

念の為に、本降りになってから空の竹バケツを洞窟の入り口に置いてある。

雨水は、比較的綺麗なはずだ。

煮沸すれば問題なく飲めるだろう。

さて、どれだけ降り続くやら……

第十四節

かなり憂鬱だ……

今日も雨が降り続き、一向に止む気配は無い。

気温もかなり低くなっている。

火を絶やすと凍えそうだ。

これは雨の対策も、基本から考え直さなければいけない……

雨の量も、季節感も、すでに想定外だ。

もし葉などで覆った仮設の住居に居たのならば、

間違いなく水浸しだ。

恐らく、この雨に耐えられなかっただろう。

この環境の中で、何とか生きていられるのもこの洞窟のお陰だ。

ここが見つかって本当に良かった。

ひたすら雨が降り続く中、横目に竹の在庫を見る。

どうせ暇だし、何か作ってみるか……

外をぼんやりと見つめながら考えてみる。

そうか！ あれを作ってみるか！

在庫の中から、手頃な竹と、少し細い竹を選ぶ。

その細い竹の先を尖らせた。

それを太い方の竹に入れてみると内径ピッタリだ。

うん、これは良い……

細い竹を下にして、太い竹を掴みながら何度も地面を叩く。

すると一段、また一段と節が抜けて行った。

最後まで貫通したら細い竹を回しながら残りの節を取る。

覗いてみれば見事に貫通していた。

これで、いけるだろう。

竹より少し長い紐を用意する。

その紐をまっすぐに整えて下に落とすように通した。

ツールナイフに付いているコルク抜きをこじって使いながら竹の先端に穴を開けた。

その穴に紐を縛りつける。

これで完成だ。

外見的には竹の先に紐が輪になっているだけ。

しかし、これには確かな用途がある。

何を隠そう、蛇を捕まえる為の道具なのだ。

まだその姿は見えていないが、捕まえれば栄養抜群の食料になる。しかし素手で挑みたくは無い。

きつとこの道具が役に立ってくれるだろう。

これのお陰で、身体もずいぶんと温まった。

まあ、すぐに冷えるのだろうか……

第十五節

だいぶ空が暗くなってきた。

太陽が見えないので、携帯の電源を入れて時間を逆算してみる。どうやら、この一日は24時間らしい。

本当は若干違うのかもしれないが、

一日一度だけ電源を入れる携帯の時計とズレは感じない。

まあ余計な計算をしなくて良いのは、とても助かってはいるのだが

……

逆算すると、今は夕方の4時頃だろう。

雨のお陰で、夜は相当に冷え込む。

火を絶やせば、凍死するかもしれないレベルだ。

これほどまでに気温差があると、本当に困る。

夜中から朝方に掛けては、危なくて寝ていられない現状である。

今のうちに寝ておこう……

何か聞こえた……

すでに外は暗いが、火は順調に燃えている。

雨は、まだ降り続けている。

しかし私が聞いたのは、それ等の音では無い。

まさか、何か居るのか？

身体を動かさずに、静かに辺りの様子を伺う。

その時、左の方で何かが動いた。

あれは、何だ？

洞窟の奥に居るようで、暗くて良く判らないが高さは無さそうだ。いや、むしろ低すぎる……

ゆつくりと火の付いた薪を手に取り、奥を照らす。

居た…… あれは蛇だ。それも、かなりデカイぞ……
どうやら、ここが暖かいと思って紛れ込んだのだろう。
基本的に入り自由なので文句も言えないが、少なくとも歓迎は出
来ない。

これは、参ったな……

本当に蛇が侵入して来るとは思わなかった……

幸いな事に、まだ私には気付いていないようだ。

しかし、いつ威嚇体制に入るか判らない。

本気になった蛇の動きは、驚くほどに速いのだ。

少なくとも、コイツと真つ向勝負はしたくない。

静かなうちに捕獲しなければ、私の身が危ない。

コイツが毒蛇だとしたら、それこそ死亡コースだ。

竹で作った道具を手に持ち、静かに後ろに回りこむ。

気付かれないように、先の輪を首にかけた瞬間に

紐を思い切り引っ張った。

蛇が強烈に暴れだし、竹に纏わり付いてくる。

うお、気持ち悪……そして重い……

左手で紐を維持しながら、右手に石斧を構えた。

恨みは無い！ すまん……

一気に首を切り落とすと、胴体がビタンビタンと暴れている。

さらに、気持ち悪……

すでに即死状態のはずなのだが、体が自然に反応しているようだ。

その姿は、相当におぞましい……

やがて静かになった胴体を外にぶら下げて、首は見えない所に置い

た。

一日も置けば、血も抜けるだろう。

蛇は気持ち悪いが、意外に美味いと聞いている。

これで、数日は食料に困る事は無いだろう。

この雨の中、おもわぬ食料が手に入ったものだ。

第十六節

雨が降り出して丸二日が経ち、厄介な雨雲はようやく去って行った。

青空を見ると、何故か安心する。

ひとまず雨は上がったが、まだ動くには早い。

食料や薪も、まだ十分にある。

私は地面が乾くまで待った。

それから丸1日の時間を置くと、やっと地面も乾いてきた。これで、やっと動ける……

さっそく水の補給だ。

私は竹のバケツを持ち、川原へと向かった。

川の水を汲んでいると、下流で水を飲む鹿のような動物がとても気になる。

そこで私は、静かに呟く。

「とても、美味そうだ……」

何とか仕留めたい所だが、今は大物狙いの狩猟道具が無い。

洞窟へ戻ると、何とか奴を仕留める物はないかと想いを巡らせていた。

まあ、基本は古典的な道具になってしまふのだが……

悩んだ挙句、私はカイリー（キラースティック）を製作してみることにした。

ブーメランに似た物だが、全く次元の違うものだ。

ブーメランとは、投げたら自分の所に戻ってくる事こそが全て。基本的に軽量で威力は無い。どちらかというと競技である。飛行中は上空に向かって大きな円軌道を描いて行くので、獲物に狙いをつけるのは至難の業。もしブーメランで狩りをしたという記述があるとしたら、それは余程の達人だったのだろう。

だが、カイリーの場合は直線的に獲物を狙って投げる。別名キラースティックと言われるだけに、それは間違いなく武器だ。全長は1メートルほどの、木の塊。手元に戻って来る事など、全く考えていない。完全に行ったきりである。

さらにブーメランは縦に投げるのが基本だが、カイリーは横投げだ。簡単に言えば、巨大なフリスビーみたいな感じだ。

への字に近い形状は、漠然と直線飛距離を稼ぐ事のみを追求したスタイル。

回転方向に対して飛行機の羽のような形状になっているので、回し投げる事で揚力が発生して、より遠くへ飛んでいく仕組みだ。大きな木の塊が威力を落とさずに、真っ直ぐ飛んでくるのは正に脅威である。

確かこの武器の発祥は、オーストラリアだったと思う。カンガルーなどを狩る為に使っていたと聞いている。ウサギ等の小動物を狙うには全く向いていない武器だ。小鳥の集団に投げ込むなら少しはいけるかもしれないが、基本は大物狙い。鹿の確保には最適である。

さあ、今度は一撃必中だ。
今回は、ミスが許されない。

失敗すれば、その鹿は二度とその場所に訪れないだろう。
あの鹿が水を飲んでいる下流までの、かなりの距離がある。
見通しは良いが、まともに狙えるのだろうか？

森に隠れて、忍び寄ってから狙うにしても
警戒心が高い鹿の事だ、簡単に逃げられてしまうだろう。
どちらにしても練習が必要だ。

私は見通しの良い場所で、確実に的に当てる為に特訓に入った。

やはり、予想通りだ。

カイリーは少し傾くだけで軌道が大きく逸れてしまう。
真っ直ぐに投げるのが、当面の課題だ。

しかし、なかなか難しい……

どうやら、フリスビーよりも繊細らしい。

まあ、構造上仕方が無いが……

その場を行ったり来たり50投ほど投げると、
ようやく軌道が安定してきた。
なるほどね……

ようやく全身運動と水平維持の感覚が一致してきた。
まだまだ練習が必要だな……

いつしか、すっかり日が傾いている。

これは、いかん……

急いで川原へと向かい、二匹の魚を捕獲してきた。
今日は、これで凌ごう。

とりあえず、鹿は後の楽しみだ。

第十七節

雨の間、わざと土の上に転がしておいた1本の薪を拾って様子を伺ってみる。

何とか、乾ききったかな？

ならば、薪になりそうな木も乾いてきた頃だろう。

そろそろ補充しなければいけなかったが、湿気た薪は極端に火が付きにくい。

わざわざ拾いに行つて、薪が湿気ていたら洒落にならない。

それだけは勘弁である。

ずっと、自然乾燥するのを待っていた。

とりあえず、まだ一週間程度の在庫は用意してあるが漠然と安心は出来ない。

また雨でも降ろうものなら、もうお手上げである。

集める時に集めておかなければならない。

今日は、薪探しに費やそう。

おじいさんは山へ柴刈りに……

おじいさんじゃねーよ！

……

うーん…… 虚し過ぎる……

暇つぶしも、ある程度レベルを考えなければなるまい……

何度が往復しているうちに、猫を発見した。

いや、猫だと思っ……

山猫だろうか？

少し、小高い所で座ってウトウトしている。

日向ぼっこだろうか？

しかし、こんな所に黒猫か……

毛艶が良さげで整った顔立ちからして、とても野生猫には見えない。

距離があるから何とも言えないが、どちらかと言うと小柄な猫だ。
あれで、生きていけるのだろうか？

まあ、森に居るのだからしっかりと生きているのだろう……

山猫はガツチリした柄付きが多いと思っていたが、それは間違っているのかもしれない。

先入観とは、恐ろしい物だ。

薪を洞窟に持ち帰り、また森へと回収に行くと
やはり、そこに猫がいる。

そして今度は、何故か私を見ている……

また、愛嬌のある丸い目だ。

まあ、少なくとも猫を食べる予定は無い。

とりあえず、無視だ……

しかし、また森に戻ってくると、今度は微妙に接近している。
ような気がする……

だが、この辺りはとても良い薪が落ちている。

私にとって、絶好の薪ポイントなのだ。

あと数回は来なければなるまい。

そして、次の往復で確信した。

何の目的かは知らないが、奴は明らかに寄って来ている。

しかし、アイツは一体なんだ？

警戒すると言う事を知らないのだろうか？

そして、さらに次の往復で遂に目の前まで来てしまった……

いったい、なんだんだ…… コイツは……

どう見ても普通の可愛い黒猫なのだが、素直に信じてはいけない。
ここは都会ではない。

もしかしたら、この可愛さで安心させて襲い掛かるつもりなのかもしれないのだ。

とりあえず、竹槍を向けて警戒してみる。
油断は禁物だ。

しかし奴はまるで警戒していないように、甘い鳴き声を上げて足に纏わり付いてきた。

だが、まだ油断してはいけない……

槍の先を向けて、いつでも刺し殺せるように構える。

私は無表情を装い様子を伺っているが、本当にどういづもりなのか……

足元で甘えるそれを見ると、本当に小柄なのが良く判る。

以前に猫を飼っていたが、それよりも遥かに小さい。

多分、体重は3キロも無いはずだ。

足に纏わり付いて、はや数分が経過した。

ゴロゴロと喉を鳴らして、ひたすらに顔を擦り付けてくる……

どうやら、完全に懐いているらしい……

これは、困った……

もし、このまま猫を連れて行っただとして、それからどうする……

現状どう考えても、この猫を養う力は持ち合わせていない。

今の生活は、不確定要素に羽が生えて飛び回っているくらいに不安定な状態だ。

実際、数日後に私一人でさえ食べていられるのかも判らないのだ。

私は、猫を振り払うように背を向けて歩き出した。

これは参った…… 付いて来やがった……

ひたすらに洞窟へと向かっているが、確実に付いて来ている。

振り返らなくても、そのくらいは判る。

確かに、猫は嫌いではない。

だが、状況が悪すぎるだろう……

下手したら、共倒れだぞ……

私は洞窟の入り口で、大きく溜め息をついた。
黒猫はキョトンとした顔で私を見つめている。
元の場所に帰る気は、一向に無いらしい……

そして、この洞窟は出入り自由なフリー空間。
猫を遮る扉など存在しない。

来る者は拒まずと良く言うが、今は去る者は追わずを優先したい……
「あのさあ…… 言っておくが、お前を食わせていけないぞ？」
それに反応するように鳴き声を上げる。
本当に、判ってるのかよ……

猫には、餌をあげない事にする。

これで諦めてくれれば、それで良い。

こういう時は、下手に期待させてはいけないのだ。

日も傾いてきた頃に、何時しか猫が見当たらなくなった。

もしや、帰ったか？

実の所を言えば、私は猫が大好きだ。

飼えるものなら、今すぐに飼いたい。

だが、私は……

あれは、母が亡くなってすぐ後の事。

一緒に暮らしていた、猫の様子が何かおかしい。
すぐに動物病院に連れて行き、必死に看病した。
しかし、日を追うごとにみるみる悪化して行き
五日後には寝たきりになってしまった。

動物病院で、何か治療法は無いのかと問いただしてみても
医者は首を振るばかりだった。

そして、私の腕の中で静かに息を引き取った。

私にとって、猫は家族同然の存在であり……

いや…… 今更、説明など要らないだろう。

私は…… 最後の家族を失ってしまったのだ……

その痛手は、あまりに大きかった。

また、何も出来なかった……

もはや、二度と立ち直れそうに無いくらいに落ち込んだ。

いわゆる、ペットロス症候群と言う奴だと思う。

そんな私が、とても自分から進んで飼おうなどとは考えられなかった。

これで諦めてくれれば、それでいい。

「そう…… それで、いいのだ……」

自分に、言い聞かせるように呟いた。

第十八節

ともあれ、私も動かなければいけない。
肝心な、食料の調達がまだだ。

まあ、この時間からなら魚が無難だろう。

川原で魚を2匹確保し、洞窟で焼いていると鳴き声が聞こえた。
ん？ まさか……

横目に見ると、そこにあの黒猫がいる……

うわ…… マジかよ……

さては魚の臭いに釣られて来たか……

頭に手を当てて半ば諦め気味に視線を向けると、猫の足元に何かが
落ちている。

ん？ なんだ？

黒猫は、改めてそれを啜えて私の所まで来た。

私は、それを見て驚いた。

「おい…… それって…… 鳩じゃないか……」

まだ取立てなのだろう、手にしてみると暖かい。

「まさか、自分で取ってきたのか？」

それに黒猫は、返事をするように答える。

なんだよ…… 私より、エキスパートじゃないか……

これまで野鳩は何度か目撃したが、他の鳥に比べて何故か警戒心が
高かった。

常に木の枝に隠れるように止まっているので、ソマイではとても捕
まえられる気がしない。

他に対鳥用の道具も無く狩る自信が無かったので、あえて避けてい
た対象だ。

それを、アッサリと狩って来るとは……

これは、見事にやられた。

私の完敗である。

「それじゃ、一緒に食べるか……」

黒猫の頭を撫でると、気合を入れて立ち上がった。

急いで川原に鳥をさばきに行つて、洞窟へ戻ると魚一匹と鳥肉の半分を焼き始めた。

「待つてろよ、美味しいの作るからな」

私の横で、黒猫はそれに答えた。

焼き上がった食材を葉の上に取り、次の魚と鳥肉を火に掛けた。

さて、葉に乗せた方を箸で適当に解し始めた。

ある程度中身を開くと、そのまま放置する。

私は焼きたてのが有難いが、熱い食べ物を猫の舌で食べるのは辛いはずだ。

私の分が焼ける頃には、すっかり冷めているだろう。

そして私の分が焼けて来たので、猫用の肉に手を当ててみると人肌程度に冷めている。

うん、これなら食べられるだろう。

「出来たぞ、ほら」

葉の上に乗った魚と肉を目の前に置くと、黒猫は行儀良く食べ始めた。

「それじゃ、私も頂こうかな」

私達はお互いの獲物を、半分づつ分け合つて食べた。

食べ終わって一息つくと、すでに黒猫が眠そうである。
かく言う私も、かなり眠かったりする。

さて、寝るか……

おもむろに枯葉に潜り込むと、後から黒猫も付いて来た。

「ん？ お前も来るか？」

それに答えながら、枯葉の中に潜り込んで来た。

おお、猫あつたけ……

これは、湯たんぼレベルだ。

猫は、なんと素晴らしい……

丸まって眠り始める黒猫を見ると、自然と癒される。

ある意味、これで良かったのかもしれないと密かに思い始めていた。

夜中に起きて火の調整をしながら水を飲んでいると、

その竹コップに小さな手を伸ばしてくる。

どうやら、黒猫も水が欲しいらしい。

もう1つのコップで水を入れてあげてみたが、

竹コップは背がありすぎて、どうも上手く飲めないようだ。

「そうか、飲み難いか…… ちよつと待ってるな……」

余っている太い竹を持ち出してきて、

節の部分を浅く切断して猫用の皿を作った。

それに水を入れてみると、黒猫は勢い良く飲み始めた。

そんなに、喉が渴いていたのか……

常に手洗い用として綺麗な予備水を竹バケツに置いてあるので、

その気になれば水などいくらでも飲めたはずなのだが……

本当に、山猫なのか？ コイツ……

黒猫の行動に、かなり疑問と違和感があった。

その猫らしからぬ行儀の良さは、飼い猫でも滅多にお目にかかれな
いだろう。

だが、飼い猫だったとしてどうする？

飼い主を探すと言っても、まだ生きている人間に出会っていないの
だ。

見つかる可能性は、限りなく低い。

まず、無理だろう……

と言うか、そもそも良く考えれば私自身が迷い人ではないか？

迷い人が迷い猫の飼い主を探すとは、本末転倒もいい所だ。

しかし、言及しておいてアレだが……

なんだ？ この異様な虚しさは……

まあ、今は気にしても仕方が無いか……

ひとまず、水飲み皿を気に入ってくれたようだから良しとするか。

それから、黒猫は自分の分とばかりに餌をちゃんと取ってくる。

時には魚だったり鳥だったりと対象はまちまちだが、

少なくとも変な獲物は持つて来ていない。

私から見ても、十分に食べられる獲物……

いや、ご馳走レベルの獲物ばかりだ。

一度、自分の3倍はあろうかと言う大きな鳥を引っ張ってきた時はさすがに驚いた。

「どうやれば、これを狩れるんだよ……」と思わず笑ってしまった。しかし不思議な事に、すっかり致命傷は与えているものの、獲物を食い荒らす事は無い。

いつも綺麗なまま、私の前に持つてくる。

まるで調理しろと言わんばかりに……

まったく、摩訶不思議な猫である。

しかし、そのお陰で私は下手な獲物が持つて帰れなくなった時があった。

最初は、激しくプレッシャーだった事は間違いない。

だが、これは私も日々精進しなければいけないと言う事。

自然の中で生きるならば、この程度で動じてはいけない。

狩りは常に一期一会、安定した捕獲量など夢の話だ。

もし私が運良く大物を捕らえて来たなら、黒猫も喜んで食べてくれる。

それが嬉しい。

たつた、それだけの事。だが、それで良いのだ。

ちつぱけな意地のために、無理やりに殺生を繰り返す必要など何処にも無いのだ。

そんな考えでは、大自然は獲物など与えてはくれない。

そう考えを切り替えてからは、これも日々の楽しみへと変化しつつある。

まあ、そんな感じで我々の不思議な共同生活は意外に上手く続いている。

第十九節

あれから2週間が経って、粘土も良い感じに乾燥してきた。そろそろかな？

今日は粘土を日干しにする。

そして森から、いつもより大量の薪を集めてくる。

労働的には通常よりもハードなのだが

さほど辛くは感じられない。

私は楽しみで仕方が無いのだ。

大きく息を吐いて、山になった薪を見つめる。

うん、これくらいで良いだろう……

まあ全部一氣に使うわけではない、在庫も合わせの薪の山だ。

これだけ集めたのは他でもない、今日は外で焚き火をする予定だ。

そして、それなりに火の規模を大きくするので場所の選択が問題だ。

もし山火事にでもなれば、この生活自体が崩壊してしまう。

極力、周囲に燃える物が無い事が理想だ。

そして万が一の時には、すぐに消火が出来る場所……

うん……川原しか思い付かない……

まあ、間違っではないはずだ。

あそこなら、大きな問題は起きないだろう。

さて、種火用に炭を持って行きたい所だが、

あんな熱くて脆い物を持って移動するには川原は遠すぎる。

新しく火を起すしかないか……

薪を運び終わった頃に、黒猫が付いて来た。

「お？ お前も手伝うか？」

黒猫は私に返事をするように鳴いた。

まあ不可能だろうが、有難い事だ。

心意気だけは、受け取っておこう。

薪を大きく広く、放射状に積んでいく。
その中心には乾燥した枯葉を下に入れた。
種火から薪へと炎が連鎖して大きく燃え上がっていく。
火が広がり安定すると、粘土で成型した物を火炎の中に入れ始めた。
いわゆる、野焼きである。

棒で成型物を上手く回しながら均等に炙っていく。
長い棒を使っているが、それでも炎は当然のように熱い……
黒猫も近寄れないのだろう、少し遠くから見つめている。
火傷をしないように風上に移動しながら物を焼いて行く。
その作業を3時間ほど続けると、やがて火の勢いが徐々に落ちてきた。
た。

さて、とりあえずこのまま放置だな……
時間が空いたので、私は川を覗き込んだ。
いるな……

竹槍が唸る度に、大きな魚を捕らえる。
今日は3匹だ。

二匹が私で、一匹が猫用である。
捕獲した魚を竹串に刺して、時間差で燃え盛る地面へと斜めに突き刺した。

魚を焼く時に限っては、野焼きは意外に便利である。
焼けるまで、少し時間がある。

大きな目の葉を取ってきて、川で洗った。
焚き火の前に座り、焼きあがった魚を葉の上に置く。
魚を解して、適当に冷ました。

私の魚が焼き上がる頃に丁度良い按配だ。
時間差焼きのタイミングも、だいぶ解ってきた。
「ほら、出来たぞ」

今まで静かにしていた黒猫は、私の声で元気に飛んでくる。

私達は、一緒に魚を頬張った。

「なんか、キャンプみたいだな」

思わず声を掛けると、黒猫が返事をする。

まあ、判っていないとは思うのだが……

私以外に、人間は居ないので仕方が無い。

相槌を打ってくれるだけでも、マシと言うものだ。

魚を食べ終わる頃には日も傾いてきた。

残った炭にまだ少し熱が残っているが、もう消えていると言って良いレベルだ。

しかし、ここで焦って手をつけてはいけない。

今日はこのまま、この場を放置する。

野焼きの周囲に大量の水を掛け、出来る限りの飛び火対策をする。

私達は火の最終確認をして、洞窟へと向かった。

あれから1日が経った。

野焼きはすっかり鎮火して、炭も冷たい。

普通に触れる状態だ。

おもむろに成型物を取り出して、植物の葉で、ひたすらにそれを磨く。

やがて炭のように真っ白だったそれは、茶色へと変わっていく。

なかなか、良い感じだ……

さらに、しっかりと磨き上げると私は頷いた。

うん……出来たぞ……

そこには粘土の塊……いや、土鍋が完成したのだ。

まあ、焼き物の精度としては大した事は無いだろう。

簡単に言えば、縄文式土器だ。

本来、陶器のような焼き物は

通常の焚き火など、比較にならない高温で焼き上げられる。その為に、焼き釜が存在する。

だが、大昔からそうだった訳では無い。

縄文時代に人々は、今回のような方法で陶器を作り上げた。

陶器の元は、このような野焼きが出发点なのだ。

まともな鍋が無い今、この粘土は貴重な発見であった。

さて、さつそく次の実験だ……

まずは土鍋を、しばらく水に浸しておく。

割れ防止の為なのだが、あまり長い時間だと鍋そのものが崩壊しかないのだ。

水が軽く染み込む程度で良いと思う。

その鍋を慎重に洞窟へと持ち帰ると、次は暖炉の改造だ。

石を上手く重ねて、暖炉の上にゴトクの代わりを組み上げる。

そこへ、静かに土鍋を乗せた。

冷えているうちに汲んできた水を流入れて、新たに薪を投入し暖炉の勢いを上げていく。

炎が安定したら、そのまま数分待つ。

やがて水は白い煙を出し始めて、沸騰が始まった。

土鍋は割れていない。

やった……成功だ……

鍋の中で湧いている水に、何か懐かしさを感じてしまう。

沸騰した水を竹コップで回収して、竹バケツに移して行く。

また水を投入して数分すれば、勢い良く湧いてくる。

「これで心置きなく水が飲めるぞ……」

その言葉に反応して黒猫が答える。

「そつか、お前も判るか！」

判るはずは無いのだが、その鳴き声が嬉しかった。

煮沸が済むと、植物の葉を重ねてミトン代わりにした物で鍋を移動して他の鍋に置き換える。

完成した、幾つも鍋の耐久実験も行った。

とりあえず、どれも使えている。

耐久性は、まずまずである。

そして、これだけあれば万が一壊れても大丈夫だ。

これを応用すれば、かなり幅が広がる事は間違いない。

私は熱い飲み物を啜り、黒猫は水を舐めながら今日が暮れていった。

第二十節

これまで肉と魚と沢蟹で凌いで来たが、野菜が食わなくなってきた。

今の食生活が長期に渡れば、ビタミンの不足も気になってくる。

だがこれまで森を見回ってきたが、キャベツや白菜など見慣れた野菜は存在しない。

まあ野生のキャベツと言う物は見かけないし、

あったとしても見慣れた姿で自生しているとは考え難い。

多分、別の植物に見えるのだろう。

野菜に関しては詳しくないので、見つけれないのも素直に頷ける。しかし、そんな私が密かに期待している物を見つけてある。

それは竹の子だ。

少なくとも、これだけは確実に判る。

何しろ土鍋が完成した今、遂に煮込みが出来る可能性が出てきたのである。

これなら、しっかりと灰汁も抜けるはず。

間違いなく、食料になるはずだ。

黒猫が、竹の子を食べられるかは非常に疑問なのだが……

玉葱が猫に良くないと聞いた事はあるが、竹の子は聞いた事が無い。柔らかい先端部分を鳥と一緒に煮込めば、何とかいけると思っただが……

まあ、始める前から深く考えても仕方が無い。

とりあえず竹を半分にしただけの小さなスコップと竹槍を持って、竹の子狩りへと出発した。

竹の子は、目に見える状態の物はすでに硬い。

少し伸びた竹の子を取って食べた事があるが、その硬さと言ったら半端ではない。

特に下の方なんて完全に木だ、木を食べていると言った方が早いくらいである。

歯には自信がある方だったが、そう言うレベルの問題ではなかった。柔らかい竹の子はまだ土の中にあるので、それを見つけないといけないが

枯葉に覆われた森の中では非常に困難である。

雑草のような小さな穂先を慎重に探して行った。

あつた……

枯葉やら何やら良く判らない中に、ようやく見つけた。

この出ているのかどうなのか、良く判らない状態が素晴らしい。さて、これからは大胆かつ繊細な作業になる。

竹の根はとても硬く、驚くほどに張り巡らされている。

これを上手く避けながら、深い穴を掘らなければならない。

以前に少しは掘った経験があるとは言え、慣れてはいない作業。

そして、このスコップはあまりに小さい。

少し、甘く見ていた……

これほどまでに掘れないとは……

根元まで掘るのに、1時間近く掛かってしまった。

すでに、腕が上がらないほどに痛い……

道具は、もう少し考えなければいけないようだ。

竹の子を左右に振りながら竹を当てて上手く力の掛かる所を探す。

ここかな？

下の方を持って力を込めると、綺麗に根から分離した。

よし、上手く取れた！

とりあえず、掘った土は元に戻しておく。

気休めかもしれないが、せめて根の保護にはなるだろう。

竹の子を持って、急いで洞窟へと向かった。

戻ってみると、すでに黒猫の前には鳥が置かれている。

さすがに早いな……

そうすると、まずは鳥が先だな……

私は獲物を手にすると、黒猫に話した。

「川に、鳥をさばきに行つて来るね」

鳥の残り羽を焼き終えて水で流したら、竹の子の下準備に入る。

まずは先端を切り落として、縦にざつくりと切れ目を入れた。

その切れ目から、皮を剥いていった。

竹の子が見慣れた状態になったら、バケツの水で洗う。

ずいぶんと綺麗だな……これなら、もしかして……

試しに、小さく切つて口に放り込んでみた。

おお……これは凄い。

灰汁が全く無いではないか。

そして、なかなか美味いぞ……

あの時の竹の子は相当にエグくて、灰汁抜きに米ぬかを使ったのだが

これなら、生のままでも十分に食べられてしまいそうだ。

さすがは、新鮮な竹の子である。

さらに口に放り込もうとした時に、冷たい視線を感じた……

横目に見ると、黒猫が私をひたすら見つめている……

「判つてゐるつてば……一緒に食べるんだよな……」

どうやら、独り占めは許してくれないらしい……

やはりここは、黒猫が捕まえてきた鳥肉と一緒に茹でる事にした。

とりあえず、昔ながらの灰汁抜き方法は覚えている。

暖炉の木炭が、米ぬかの変わりとして使えたはずだ。

だが、今回は出番が無さそうである。

でも確か他の山菜などにも応用できたはず、次の機会にでも試してみよう。

今回、下茹での必要ないだろう。

だが、一応冷たい水から始めるのが無難だ。

適当に切った竹の子と、鳥肉を土鍋に入れて暖炉に置く。

あまり炎が強いと見事にふきこぼれるだろうと思い、炎の勢いを徐々に上げていった。

鍋がグツグツと言い出したので、そこで火力を慎重にキープする。

相当に火力を押さえて、尚且つ消えない状態を維持するのは意外に難しい。

だいぶ使い込んで調整に慣れているとは言え、予想以上に繊細な作業だ。

こんな事なら、小型暖炉で茹でた方が楽だった気がする……
ちよつと失敗したな……

一人で文句を言いながら一時間ほど茹でると、辺りに良い臭いが漂ってくる。

竹串で突付いてみると、すんなりと通った。

まあ、こんなものだろう……

先に猫用の皿に、土鍋の中身を取り上げると白い煙が大量に湧き上がる。

おっと……これは、いくら何でも熱過ぎるだろうな……

「これは冷めるまで、結構掛かりそうだぞ？」

私の言葉に一声上げると、諦めたようにその場に伏せて居眠りを始めた。

何？ 今の判ったの？

この猫は、言葉が判っているのではないだろうかと思う時が多々ある。

本当に不思議な猫である……

そろそろ冷えてきたので、暖炉の火力を上げたい。

だが、鍋を火に掛けたままでは良く無いだろう。

葉のミトンで、慎重に土鍋を下へと置いた。
まあ保温力はあるそうなので、猫用が冷めるまで待つても大丈夫だろう。

抑えていた暖炉に薪を放り込んで、炎の勢いを上げた。

暖炉の調整をしていると、黒猫が起き出してきた。

「ん？ そろそろ冷めたか？」

猫用に手を当ててみると、良い感じに冷めている。

「さて、夕飯にするか」

私の言葉に答えるように黒猫は鳴いた。

箸で竹の子を摘みながら黒猫を見ると、美味しそうに食べている。竹の子の柔らかい先端も入れたのだが、それにも食らい付いていた。おお……竹の子も食べられるのね……

しかし、食べるの早いな……

スープも、物凄い勢いで飲んでいるぞ……

おいおい……これは、おかわりになりそうだな……

私は急いで予備の皿に次の分を入れて、息を吹きかけながら必死に冷ます。

その時、鳴き声が聞こえた。

「あらっ、間に合わなかったか。もう少しだからな」

まあ食べられるであろう温度まで下げて、黒猫の前に置いた。

「このくらいで大丈夫か？」

一声鳴くと、また元気良く食べ始めた。

「そうか、そんなに美味いか」

確かに、スープは鳥の出汁だ。

猫にしてみれば、きっと美味しいのだろう。

私には、かなり薄味なのだが……

それでも私は、今確かに微笑んでいる。

こんな気持ちは、ずいぶんと久々のような気がするな……

食事の材料に鳥や魚があると、アイツも良くおねだりをして来た。ひたすらに見つめて来る視線があまりに痛いので、いつも猫用に味付け無しで調理した物を用意していた。私の横で美味しそうに食べる姿には、心から癒されたものだ。今思えば、本当に懐かしい。

私が友人宅から帰ってきた深夜に、草むらに捨てられていた三毛の子猫。

ダンボールの中で、親を求め泣き続ける姿を見ていられなかった。本当に、怖かったのだろう。

私の差し出した手に、激しく威嚇し攻撃してきた。

私は血が溢れる傷など気にせずアイツを抱き上げた。

「いいからウチに来い……」

私はジョニーと名付け、その猫を心から愛がった。

無邪気なジョニーは、母にも良く懐いていた。

あの時期だけは、私達に本当の笑顔が溢れていた。

確かに金は無く、間違いなく貧乏な生活ではあったが、

あれが一番幸せなひと時だったのではないかと心から想っている。

何故か面影が重なってしまふ。

まあ行儀の良さで言えば、さすがにこの黒猫ほどでは無いのだが、その姿は、まるでジョニーが帰って来たように思えてならなかった。しかし、私の腕で息を引き取ったあの姿は今も目に焼き付いている。それは、変え様が無い事実。

ジョニーは、もう居ないのだ……

だが今は、すっかりこの黒猫に癒されてしまっている。

何時しか、この穏やかな時がずっと続いて欲しいと心の奥で願っていた。

第二十一節

あれから地道に練習を重ねてきたカイリーだが、
今ではすっかり軌道が安定して、もはや的を外す事は無い。
これなら、いけるはずだ……そろそろ試し時かもしれない……
私は、微かな笑みを浮かべた。

今までの傾向からして鹿が川に現れるのは、朝から昼の間と、夕
方の僅かな時間だ。
いつも時間が微妙にずれているのは、狙われない為の本能かもしれ
ない。

時間が特定出来ないのは厄介だが、毎日現れるのは確かだ。
狙い時は必ずあるはずだ。

私は朝から、川原で待機していた。

来た……

一頭の鹿が、ゆつくりと川に近づいてくる……

私は静かに目を閉じた。

そう、何も考えてはいけない……

私はマシンだ……手順を只こなすだけだ……

やがて、音が消えてゆく。

そして、静かにターゲットを見据えた。

カイリーが、川沿いを翔け抜けた。

その回転が浮揚効果を生み、速度が衰える事は無い。
目標へと一直線に襲い掛かった。

鹿は叫ぶ間もなく、その場に倒れこむ。

チャンスは一瞬、ここで意識を取り戻し逃げられたら鹿は二度と現
れない。

私は竹槍を持って走った。

そして、その側頭部に向けて渾身の一撃を放とうとした時……

私は、異変に気付いた……

こいつ……目が、おかしい……

すぐに首に手を当ててみるが、すでに脈は無い。

当然のように呼吸も止まっている。

完全に開いた瞳孔……

これは……即死だ……

横に転がったカイリーを拾い上げて真剣に見つめた。

そこまでかよ……

いったい何だよ、この威力は……

鹿はこれほどにデカイのだ。頑張っても、せいぜい気絶が良い所だ
と思っていた。

まさか一撃で仕留めるとは……

たかだか木の棒の恐るべき威力に、すこし背筋が寒くなった。

両手を合わせて黙禱を捧げると、いつもの場所まで鹿を運ぶ。

しかし、重い……

本当に、重い……

しかし、移動しない訳にはいかない。

もし仲間が来れば、ここは一気に警戒地域に指定されてしまう恐れ
がある。

動かせない事はないのだが、簡単に担げる重さではない。

それに、妙にクネクネするので余計に持てない。

下流に移動するなら川が使えるそうだが、上流に向かうとなると水の
抵抗が凄いはずだ。

最悪の場合は、そのまま鹿ごと下流に流されてしまう。

私は、ひたすらに川原を引きずってきた。

もう無理……

何とか辿り付くと、汗だくで座り込んだ。
ああ……力を入れ過ぎて、目眩がする……
ダメだ、しばらく休もう……
硬い岩場に倒れこむように横になった。

こんな風に空を見たのは、何時の事だろうか？
記憶を辿っても、子供の頃の事しか思いつかない。
大の字に横になって青空を見ると、雲が静かに流れていく。
鳥の声と、川のせせらぎが心地よい。
なんか、のどかだよなあ……

30分ほど休憩すると、気合を入れて立ち上がった。
さてと、再開するか……

まずは鹿を川の水際まで持つてくると、
喉の真ん中辺りの間接にツールナイフを突き刺す。
グルリと回すと首の骨が分離した。
さらに切り口を広げて、頭を川に突き出した。
動脈を一気に切断すると、大量の血が溢れてくる。
足を持ち上げたりしながら、ひらすら血を川に流した。

さて、これからが大変だ。
肛門から首にかけて切断していく。
うーん……かなりキツイ……
まだ、しぶとく血が出てくる……
確かに食べようと思って狩ったのだが、
その血生臭さは予想以上にキツかった。
切断が終わった切り口に力を込めて引き裂くと、それが出てきた。

内蔵がデカイ……

うわ……

これは……たまん……

思わず吐き気を伴うが、目をそらして耐える。

この手の仕事をしている人は、どういう精神状態なのだろう？

全く、理解できん……

もし、この手のバイトをしたなら、その日に逃げ出しただろうな……
だが、この作業をする人が居ないと肉なんて食べる事が出来ないと
考えたら、

その仕事を続けている人々は、本当に凄いなと素直に思った。

あと、もう少しの辛抱だ。頑張ろう……

黒猫が、内蔵に興味を示している。

「おい、生肉は辞めておけよ…… 腹を壊すぞ……」

私の声で、それ以上近づくの辞めた。

少し残念そうだが、諦めてくれたようだ。

よかった…… 生肉を食べた口で舐められたら、たまった物ではない。

さつきからキツネらしき生物が、遠くでこちらを見ている。

そうか、これは丁度良い……

内蔵を適当に水で洗って、キツネが居る所へ持って行った。

私が歩いていくと、キツネは警戒して森に隠れたが

物を置いて川に戻ると、恐る恐る寄って来た。

やがて、それを啜えて森へと帰っていく。

なかなか良い処理班が居たものだ。

その他の半端な所は、素直に川の藻屑となってもらった。

きつと、サカナ君が処理してくれるだろう。

これを餌に集まってくれば、私達の食料も増えると言う物だ。

内臓が無くなったら、皮を剥いでいく。

大きいだけに、なかなか大変だ。

だが、この皮はどうしても欲しい。

慎重にツールナイフを入れていった。

一枚の革状になると、血と肉片を綺麗に洗った。

もろに肉の状態になったら、各部位に切り分けて川の水につけて肉を両手で絞る。

じゅわつと血が出てくる……

さらに川底の岩に押し付けて、搾り出す。

血が出なくなったら、流れの穏やかな場所をせき止めて肉を水に晒した。

そして、このままじっと待つ。

しばらく経って肉を引き上げると、すっかり血生臭さも抜けていくようだ。

これなら、大丈夫だろう……

何とか、作業は終わった……

しかし、もうたまらん……

何か具合が悪くなっているような気がする……

作業を終えた私は、その場にしばらく座り込んでしまった。

この疲労感は何だ？

そして、この罪悪感はいったい何なのだ？

私の心の中で、何かに押し潰されそうな感覚がひたすらに続いていた。

しかし、見れば見えそうな部位がまだ一杯ある。

特に、この骨と角は色々と見えそうだ。

川で洗い流しながら、持ち帰るものを見繕った。

全てを洞窟に持ち帰ると、今日食べる分以外の肉は適当にぶら下げておく。

まあ気温は低いし、風通しも良いのですぐには腐らないだろう。

さて、今日は足の部分を食べてみよう。

肉を適当に切り分けて暖炉にかけた。

先ほどの生臭さとは一転して、辺りに良い香りが立ち込めてくる。こうなると、まったく別物だな……

先に焼きあがった肉を、猫皿に入れて冷ます。

しばらくすると、私の分も焼きあがった。

「さて、食べようか」

私の声に、黒猫は一声答えた。

おもむろに肉を食べてみる……

うん、美味い……

臭みは強いが、れっきとした肉である。

そして、満腹になるほどに食べる事が出来た。

黒猫も、満足そうに毛繕いをしている。

苦労した甲斐があるというものである。

今日は、私も大満足だ。

しかし、まだ肉は大量に残っている。

何か保存法を考えなければ……

だが、とりあえず眠い。

今日は、本当に疲れた。

私達は夕方から床に突いた。

第二十二節

ふと目が覚めた。

黒猫が珍しく、外に向かつて威嚇をしている。

辺りはすっかり闇に包まれていた。

暖炉の炎だけが妙に明るい。

暗闇に目をやっても、私には何も見えない。

だが、黒猫は背中の中を毛を逆立てて、しきりに威嚇音を発している。

その場で耳を澄ませて辺りの様子を伺う。

確かに、さっきから森の方から物音がする……

嫌な予感がする……

私の勘もざわめいた。

これは、どうやら尋常ではない。

今回は蛇なんて生易しい者では無い、とてつもなく危険だ。

まだ姿は確認出来ないが、間違いなくヤバイ何者かに狙われているようだ。

肉の臭いに釣られたのだろうか？

鹿だけに……

いや……こんな時に、くだらない駄洒落は辞めておこう……

出来れば、シカトして欲しいなんて口が裂けても……

あつ、言っちゃった……

やがて、唸り声が聞こえてきた。

野犬か？ やはり来たか……

私は、火の付いた薪で暗闇に向かつて牽制するが、どうやら効き目が無いようだ。

思ったほど、炎を恐れていない……

これは、もしや以前に人間を襲った事があるのか？

まさかと思うが、ここに住んでいた人も……

やがて炎に照らされるように、ゆつくりと視界に現れる。

てつきり犬かと思ったが、あの精悍な顔付きからすると狼だろうか？

まあ、考えている余裕は無さそうだ。

すでに人を襲っているとするなら、かなり強敵だ。

だが、逆にこれは仇討ちでもある。

そして、失敗は断じて許されない。そこには死が待ち受けるだけだ。

敵は3頭……

牙をむき出しにして威嚇してくる。

これは、懷いてくれそうに無い……

ほう……奴等、本気だな……

なかなか良い目付きをしている。

あれは、ハンターの目だ。

ならば私も、一切遠慮はするまい。

命を掛けたこの勝負、受けて立とう。

火の付いた薪を洞窟の両サイドに置き、なるべく入り口を狭くする。

これで、奴等は一頭づつしか襲って来ることは出来ない。

確実に、差しの勝負に持ち込める。

私は竹槍を、後ろに隠し気味に構えた。

黒猫もまだ威嚇を続けているが、ちょっと相手が悪すぎるだろう。

「お前は下がってる……いいな？」

私が言っと、チラッと視線をこちらに向けて、洞窟の奥へと走って行った。

その時、一頭が真ん中から襲い掛かって来た。

かなり直線的で戦術には欠けるが、狩る自信があるのだろう。

その足は、確実に速い。

それを、私は限界まで待つ。

ここが勝負の分かれ道。

冷静な一撃を放つには、何処まで恐怖に絶えられるかが肝心だ。

奴が牙をむき出して飛びかかったその時、一気に竹槍を前へと突き出す。

「キャン！」という甲高い叫び声とともに

槍は口の中を突き抜けた。

痙攣を起こしたままの狼をおもむろに引き抜くと、すぐに次が襲ってきた。

奴が飛び跳ねる間合いを見極めて竹槍を真横に振りぬく。

深く切りつけられた目玉から血が飛び散り

視界を奪われた奴は一瞬怯んだ。

私は槍を構えなおし、真下に向けて一気に突いた。

「ギャン！」

叫びも虚しく、槍は頭蓋骨を貫通した。

突き刺さった槍をそのままにして、予備の竹槍に持ち替える。

頭上で一周回し、静かに構えなおす。

炎が揺らめく中、奴は低く唸り声を響かせて私の隙を狙っている。

お前が最後だ……いざ尋常に勝負……

張り詰めた空気を切り裂くように

奴は走り出した。

間合いを見極めて槍を突くが、

その瞬間に奴はステップを効かせて後ろへと飛び跳ねる。

ほう……やるな……

だが、それは織り込み済み。

さらに踏み込み、もう一度突いた。

奴は空中で首を振り、それを寸前の所で綺麗に交わす。

そして次の踏み込みに備えて着地体制に入った。

着地した瞬間、私の喉元に向かって飛び掛るつもりだ。

だが、甘い！

私は三段目の突きを放った。

これが、私の本当の狙い。

着地と同時に奴の喉元に、槍が深く食い込む。

全力の蹴り足と、腰の入った渾身の一撃は、

強烈なカウンターとなり奴を一瞬で絶命させた。

槍が刺さったまま、白目を向いてぐったりとしている。

必殺、三段突き。沖田 総司が得意だったとされている技だ。もっとも、彼は日本刀だったが……

槍を引き抜きながら、奴に呟いた。

「相手が悪かったな……恨むなら、沖田を恨んでくれ……」
そして、狼との激戦が幕を閉じた。

鹿も凄かったが、さすがに3頭もいると血の量が凄い。

そして、鹿とは違う独特な臭いが鼻を突く。

素直に吐きそうだ……

そして、入り口に飛び散った血が強烈だが、

掃除は明るくなってからだ。

洞窟の横に3頭の残骸を逆さに吊るして放置した。

今日は、さすがに疲れた……

竹バケツの水で手と槍を洗って、そのまま眠る事にした。

「おいで」

私が呼ぶと、黒猫は走って来た。

「もう、たまらん……寝よう……」

黒猫を抱きしめて、静かに目を閉じた。

さすがに、あまり眠れなかった……

都会暮らしの欠点だ。

どうも、こういったリアルなスプラッタ系は苦手である。
明るくなると残骸を持って、速攻で川原へと向かう。

けっこう重い……

3頭を一気には持てなかった。

川原に付くと、革と肉を切断して、内蔵を取り除いてゆく。
少し慣れたとはいえ、昨日と違って今日は3頭連続だ……

やはり、たまらんな……

強烈な吐き気を我慢しながら、作業を続けた。

だが、この狼の襲撃によって、思わぬ食料が手に入った事は確かだ。
そしてこの革は確実に使える。

私は慎重に狼をさばいていった。

残したのは革と肉、そして骨だ。牙も取って置こう。

しかし、内蔵の量が半端ではない……

脳味噌も大量にある……

どうすっかな……これ……

少なくとも、食べる気にはならない。

目が合ったんですよ、こいつ等と……

さすがに、無理です……

またキツネが見ているので、取り出した内臓を持って行った。

一度に持ちきれないので、3回往復した。

こんなに持つて行ってくれるだろうか？

ちよっと心配していたが、その必要は無かったようだ。

いつしか、キツネは6匹に増えている。

あんなに居たのか……

私が置いた内蔵を、全部啜えて森へと帰って行った。

綺麗になった肉を持ち帰って洞窟の中にぶら下げてから、

竹バケツを持って、何度も往復しながら入り口を掃除した。
血って、なかなか落ちないんだな……
そんな感想しか出てこなかった。

この日の食事は、狼の煮込み。

以外に塩気があるのが、妙にリアルだ。

だが、文句なしに美味い……

黒猫も、夢中で食べている。

決して、私の舌が可笑しい訳では無さそうだ。
それだけは間違いない。

ただし、味にクセはある。そして硬めだ。

鹿がマトンのような感じでクセが強い。

狼は少し豚に似ている感じだが、鹿よりはマシと言う程度で、
どちらにしても、一般受けはしない味だ。

牛肉が懐かしいとしか言いようが無い……

それでも、久々に私の舌を満足させてくれた。

そして、人は命を頂いて生きていると言う世の理と
それに伴う残酷さを実感していた。

せつかく頂いた命は、無駄に出来ない。

あちこちにぶら下げてあるのだが、

このまま放置しておけば、やがて腐ってしまうだろう。

鹿の肉と一緒に、火を通してみた。

少なくとも、生よりはマシなはずだ。

だが、保存に不安が残るのは確か。

これだけ肉があれば、本格的な燻製にも挑戦するべきかもしれない。
保存には、確実に燻製の方が適している。

近いうちにも実験してみよう。

いずれにしても、今はすぐに狩りを再開する気にはなれそうもない。

多少は慣れていると言っても、かなり精神的にキツイのだ。短時間に、あれだけ殺してしまった罪悪感であろうか？

だが、やらなければ私達がやられていた……

理屈では理解できるのだが、心のどこかで納得がいかないらしい。これも、いずれは慣れて行くのだろうか？

さすがに、今日は笑顔の1つも出せなかった。

それを察してか黒猫は、先ほどから私の膝の上で寝ている。

少なくとも今は、この小さな黒猫に助けられているのは確かだ。

誰かを守りたいを願う時、人は驚くべき力を発揮するものだ。

きつとコイツが居なければ、狼を目の前にしてあんな勇氣は出せなかっただろう。

今思えば、無謀極まりない……

今更ながら、背筋が寒くなった。

ひとまず、ゆっくりしよう。

肉の在庫を考えれば、焦って狩らずとしばらくは食べていける。まあ最悪の時は、黒猫も自分の食料は確保してくるだろうし……

第二十三節

狼と鹿の皮を干しておいたら、なんか良い感じになってきた。頭の革がそれと判るような仕様は、別に私の趣味ではない。

ただ単に、革を切断するのが勿体無かつただけだ……

だが、これはとても良さそうだ。

全長3メートル近い毛皮が1枚と、

2メートル弱の毛皮が3枚。

これは十分に布団の代わりになる。

とても暖かそうだ。

まあ、毛皮としては完成度が低いのは確かだ。

もつと念入りに綺麗にした方が良いのは判るし、

もつと乾燥させた方が良いに決まっている。

なめしたりすれば、もつと良くなるだろう。

しかし、そこまで追求する気も無い。

そして、狼3頭分の独特な臭いは、この程度の洗浄で落ちると思えない。

これは、かなりの効果を発揮するだろう。

狼は他の動物にとっても脅威であり、恐怖の対象だ。

ここに狼が住んでいると勘違いしてくれれば、

相当に防衛の予防線になるはずだ。

今までより、少し安心して眠れそうな気がする。

さつそく毛皮の布団を敷いて横になってみる。

おお、あつたけ……

これは、凄い……

さすが毛皮だけの事はある。

枯葉とは保温性が桁外れで、夜中に寝呆けていたとしても全く死ぬ

気がしない。

「お前も、おいで」

臭いに嫌がるかも？　と思っていたが、意外にも喜んで中に入ってきた。

猫で、さらに倍……あつたけ……

これまで、あまり睡眠が取れていなかった私は
いつしか深い眠りへと落ちていった。

何やら光が気になり、目を開けると

あまりの眩しさに、すぐに閉じてしまった。

奴だ、あの怪しい光だ……

いったい、何処から出てきた？

腕を翳しながら光の様子を見る。

気が付けば、目の前に黒猫が座っている。

やがて、ゆつくりと口を開いた。

「お前は、時を失った……」

私はそれに驚き、おもわず呟いた。

「おいおい……お前、何で話してるんだよ……キモイよ……」

だが、その言葉は完全に無視されているようだ。

「お前は、在るべきはずの時を取り戻すのだ」

何がどうなって居るのか良く判らずに、ただ呆けている私に続けた。

「本来の目的へと向かうのだ。真実を知る為に……」

私は飛び上がるように起き上がった。

黒猫は？！

慌てて確認すると、腕の中でスヤスヤと眠っていた。
大きく溜め息を吐いて、冷静さを取り戻すと鳥の声が聞こえてくる。
それに気が付いて外を見れば、すでに朝だ。
本当かよ……そんなに寝てしまったのか……
寝ている間に、襲撃されなくて良かった……

しかし、あれは夢なのか？

まあ飛び起きたのだから、多分夢だろうな……

猫が話すって……いくら何でも可笑しいだろう……

いやあ……さすがに、それは無いわ……

私は、一人で夢を思いだして笑みを浮かべていた。

だが、はつきりと覚えている。

しかし、怪しい光の野郎……

いったい何のつもりだ？

在るべきはずの時？

本来の目的？

うーん……全く意味不明だ。

第二十四節

あの狼の襲撃以来、新しいお客様は訪れては居ない。毛皮の布団もあるので、なかなか快適な睡眠が取れている。だいが、ここの生活も落ち着いて来た。

さて、そろそろ作るか……

おもむろに、太い竹を手にする。

かなり大きなサイズなのだが、真つ二つに割れてしまっていた物だ。だが、これはこれで使い道があるだろうと拾っておいた。私は、地道に加工を始めた。

先端をノコ代わりの石で三角に削り取り、30? ほど後の左右に切り目を入れてから後方の長い方を一気に割る。

握れる程度に太さにしたら、それを持って川原に向かった。いつもの砥石代わりの岩で、ささくれた所を削っていく。

綺麗に仕上がった部分を、手を滑らせて確認する。

後は、先端の研ぎだ。

今回は、竹槍ほどの鋭さはいらない。

薄すぎれば、かえって使い物にならないだろう。

適当な所まで削っていった。

これで簡易スコップの完成だ。

竹が分厚いので、なかなか丈夫である。

切り目の部分に足を掛ければ、かなり深くまで掘れるはずだ。

もう、竹の子狩りの時のような苦労はしたくない。

今回は、あの失敗を十分に反映させたつもりだ。

スコップを持ち帰ると、洞窟の一番奥を掘り出した。思いの他、相当の勢いで掘れている。

とりあえず成功だが、この手の作業はハードだ。

そして洞窟の奥は、風が通らない為に意外に暑い。簡単には作業が進まない。

しかし、この場所が最適であろう。

汗だくになりながら、土を掘続けた。

ようやくの思いで、１メートル近い穴が開いた。

ひとまず外に出て、風に当たる。

汗に風が当たる度に、涼しさが増していく。

大きな溜め息をつきながら青空を見ると、以前の事を思いだした。

何だか、ガテン系のバイトでこんな雰囲気があったなあ……

今思えば、懐かしい……

こんな時は缶コーヒーが無いのが少し悲しいが、こればかりは仕方が無い。

竹コップの水を飲み干すと、勢い良く立ち上がった。

さあて……切りの良い所まで一気に行くか……

底の深い土器を用意する。

野焼きをした時に、これを想定して作っておいた物だ。

闇に目を慣らし、慎重に探し当てた骨を土器の中に１つつつ丁寧に入れていく。

これで全部かな？

最後に頭蓋骨を静かに乗せた。

手を合わせて、黙祷する。

ピツタリではないが、それに合わせて作った蓋を被せた。

これが、骨壺代わりだ。

長い木の棒と、その半分程度の棒を用意する。

今回の材料は竹では無い。

とても良い薪になりそうな素材なのだが、ここは最良の材料を提供したい。

二つの木に切り込みを入れていく。

こういう時はノミが欲しい所だが、そんな物はない。石を代わりにして、慎重に彫っていく。

それなりの形が付いたら、二つの木を組み合わせで一氣に石で叩き込んだ。

甲高い綺麗な音がして、しっかりと食い込んだ。

これで十字架の完成だ。

まあ、意外に良く出来たと思う。

十字架ではなく石でも良かったのだが、何となくこの形にしてしまった。

何の効果があるか判らないが、不思議とこれが良いと思ったのだから仕方が無い。

なんだが縄文式土器に十字架と、和と洋が入り混じってしまったが問題は無からう。

これが、今の私に出来る精一杯だ。

上から石で叩いてしつかりと十字架を据え付ける。

次に、骨壺を穴の中に入れる。

ここで割ってしまつては、何の意味も無い。

慎重に壺を移動した。

その上に、掘った土を被せたら軽く慣らして作業は終了だ。

竹コップに水を入れて十字架の前に置いた。

これで、ようやく約束を果たせた……

墓の前で手を合わせて、静かに黙祷した。

「やっと墓が出来ました、安らかに眠ってください」

黒猫は、それを隣で静かに見守っていた。

第二十五節

竹槍を持つて、森の様子を見に来ていた時の事だ。狩りに来たらしき老人と遭遇した。

それは激しく驚かれた。

だが言葉が、まるで通じない。

困った……さらに弓か……

場合によっては厄介だな……

老人はなかなか立派な弓を携えていた。

風体からして、間違いなくハンターだ。

腕は確かなのだろう……

そして、背中には矢筒が掛けてある。

しかし困った……

何を言っても通じない状態で、相手は腕の良さそうなアーチャー……
危なすぎる……

とりあえず敵意が無い事だけは必死にアピールしているつもりだが
今一步、通じていない様子だ。

非常に困った状態である。

その時、老人の指が背中へとスツと伸びる。

私の全身がざわついた。

殺される……

私は条件反射で竹槍を老人の目の前に突き付けた。

その攻撃態勢のまま動きを止めた。

私は老人の目を見つめたまま、僅かに首を振る。

思いの他早かったであろう私の行動に

目を見開いたままの老人は静かに頷いた。

やがて、矢に伸びた腕が静かに下りた。

私も静かに竹槍を下して、構えを解いた。

とにかく付いてきて貰おう……

誤解を解くには、もはやそれしかない。

私はわざと背中を見せて、さらに敵意が無い事を見せ付ける。洞窟の方角を指差して歩き出した。

老人は私の後を付いて来ている。

後ろから攻撃されなくて、本当に良かった……

私の住む洞窟に到着すると、老人は驚いた顔をしている。

まずは入り口で待つてもらおう。

黒猫を呼ぶと、私の所に走ってきた。

とりあえず、抱きかかえて老人に見せる。

微笑んでいるところを見ると、これで黒猫が攻撃される事はないだろう。

暖炉の炎を調節してから、中に招き入れた。

私は大きな溜め息の後に、大げさに両手を上げて首を振ってみた。

これで判らなければ、もう仕方が無い……

老人は、私の寢床に駆け寄った。

狼の毛皮を手にして震えている。

なんだ？

目を丸くして毛皮と私を見比べて何か言っている。

「お前がやったのか？」と聞いているのかな？

まあ、信じられないだろうなあ……

私は竹槍と狼の毛皮を持ち、突き刺した時の穴に当てた。

そして、洞窟入り口に黒く残った跡を指差す。

老人は、唸りながら何度も頷いた。

どう解釈したのだろうか？

別に武勇伝のつもりは無いのだが……

どうも老人は、私の作った道具に興味を引かれているようだ。色々な道具を一つ一つ手にしながら唸っている。

そして、それ等を指差して私を指差す。

多分だが、

「お前が作ったのか？」と聞いているのだろう。

私は素直に頷く。

老人も妙に頷いている。

本当に通じているのだろうか？

今度は、何やら土鍋に興味津々に見ている。

それを指差しながら、突然に私を見た。

一体、何が聞きたいのだろう……作り方だろうか？

私は残りの粘土を指差した。すると、また唸り声を上げている。

とりあえずは、納得してくれているようだ。

老人はおもむろに石斧を手にして、さらに石刃の部分を指差した。

私は川原の方角を指差した。

なんだか老人は、行く気が満々なようだ。

仕方が無い……

川原へ案内すると、砥石代わりの岩に竹槍を擦りつける様なジェスチャーを送った。

それに目を丸くして頷いている。

まあ、ここは何かしら実践するのが一番良いだろう。

静かに水際まで来た私は、岩陰近い水面に竹槍を一気に投げ付けた。川底に竹槍を押し付けてから引き上げると、そこには魚を刺さっている。

「Oh!……」とアメリカ人のような声を漏らした。

その場で魚をさばいて私は洞窟に歩き始める。

竹串に波状に魚を差して、暖炉へと突っ込んだ。

今は、炎が少し強い。

焦げないように加減しながら、しっかりと焼き上げた。

私はそれを老人へ差し出す。

「どうぞ、食べてください」

通じたかどうか判らないが、老人は素直に魚を頬張った。目を丸くして、何度も頷いている。

はたして、美味かったのだろうか？

塩が無いから、味は薄いはずなのだが……

まあ喜んでくれているようだから今は良しとしよう。

食べ終わって、しばらく満足そうにしていた老人だったが
つい先程、何とも言えない視線を注がれてしまった。

今は視線をずらし、何やら勝手に思いにふけている。

完全に自分の世界に入ってしまった様だ。

まあ、しばらく放って置くしかないか……

私の状況は、誰にもどうにも出来ないだろう。

そんな事は良く判っているつもりだ……

下手に関われば、相手に迷惑を掛けてしまう可能性は高い。

とりあえず、顔見知りのレベルにはなれたはずだが、

友人にはなれないかもしれない。

何しろ簡単な単語でさえ判らないのだ。

言葉の壁とは本当に大きい物なのだ。

老人が、いきなり立ち上がった。

突然だったので驚いたが、荷物を纏めている。

帰るのかな？

何やら私に向けて話しているが、それは全く判らない。

これでは、下手に頷く事も出来ない。

やがて、両手で握手をされてしまった。

老人は何故か真顔だ。

これは、困った……

こう言う時は、どういうリアクションをしたら良いのだろうか？

そして私に笑顔で手を振った。

多分、別れの挨拶だろう……

せめて、ここくらいは合わせて良いだろうか？

私も小さく手を振った。

第二十六節

あれから2週間が過ぎた時、あの老人が尋ねてきた。突然の訪問に驚いたが、ひとまず挨拶を交わす。と言っても、お辞儀しか出来ないのだが……

おもむろに、老人は紙とペンを差し出した。一瞬、何がしたいのか良く判らなかったが、そう言う事が……

何か言いたい事は判って来たぞ……
まあ、確かに意思の疎通を図るには描くのが一番だ。

老人が絵を書き始める。

紙の端に家のような物を書いて、その対角線上にこの洞窟らしき絵を描く。

間に書いた適当な線は、深い森の事だろう。

そこに矢印を書くと、遠くを指差した。

ほう……あの方向に、家があるのだな……

次に、人間を書き出した。

二人のようだ……

私と老人を指差して、また遠くを指差す。

洞窟から家までペンで線を引いた。

なるほど……

どうやら、付いて来るように促されているらしい。

私は腕を組んで眉間にしわを寄せながら、悩んでいる事をアピールした。

いや……実は、本当に悩んでいたのだ。

確かに、ここは激しく不便である。

明日を生きて行けるのかも良く判らない。

それに関しては、全く自信が無い。

だが、これまで試行錯誤を繰り返して少しは安定して来た。本当に最低限の生活だが、暮らしては行けているのだ。

そして、この誰にも気兼ねない生活を私は気に入っていた。

実際に、人と関わる事自体にうんざりしていたのも確かだ。

あの人ごみの中で希望を失い、都会の片隅で死んでしまおうと思っていた。

そんな私が今更、言葉が通じない世界に放り込まれて、どう対応して良いのかも判らないと言うのが本音だ。

それなら、まだここに居た方が数段マシに思えたのだ。

しかし、その時に何かを感じた。

上手く説明は出来ないが、第六勘が何かを知らせている。

行けと……言うことか？

それからしばらく悩んだが、勘の意向は変わらないようだ。

まあ、これで老人に付いて行っただとして別段損は無いはずだ。

この森の先に、何かあるのかも気になる。

目を閉じて、静かに決意を固めた。

私は大きく頷くと、身振り手振りで説明を始めた。

すると、老人も理解したようだ。

笑顔で頷いている。

私は黒猫を呼んだ。

抱きかかえながら指を刺すと、笑顔のまま頷いている。

猫も受け入れてくれるようだ。

私の解釈が、間違っていないければ良いが……

そうと決まれば、さっそく準備を始めなければいけない。
荷物をまとめ、移動に備える。

とは言え、ここに在る物を全部は持つていけない。

まあ、基本的には必要無いだろう。

もし必要なら、取りに来れらるだろうし……

必要最低限の装備を選んだ。

私が毛皮を放置していると、老人が指を刺して何か言っている。

これも持つて行けと言っているのだろうか？

まあ、幸いさほど重くは無い。

仕方が無いので、それも荷物に追加した。

私は竹コップに水を入れて、洞窟の奥へと向かう。

十字架の前に置くと、その場で手を合わせて黙祷した。

「これまで、有難う御座いました。本当に助かりました。貴方の事は忘れません」

これまでの事を思い巡らせながら手を合わせていると、黒猫も側に来て十字架を見つめている。

やがて老人も隣に来て、一緒に黙祷を捧げた。

荷物を持つと、必然と両手が塞がってしまう。

私が困っていると、黒猫が肩に飛び乗ってきた。

さすがは猫、不安定な肩の上でも一切バランスを崩さない。

「それで、大丈夫か？」

私が問うと、黒猫は一声鳴いた。

いよいよ、出発の時だ。

この先、何が待っているか判らない。

だが、この老人に付いて行く事を選択したのだ。

私に、後悔は無い。

洞窟を振り返り、静かに思いにふける。

今思えば、色々な事があつた。

これほど、本格的なサバイバルをしてきたのも初めての事である。本当に、良く生き残つてこられたものだ……

ふと、老人に声をかけられた。

視線を向ければ、神妙な顔つきで何度も頷いてくれている。私も老人を見つめ、大きく頷いた。

さあ、行こう。

どうせ、一度は死んだ身じゃないか。

もはや、恐れる事など何も無い。

振り返るな。

これから起こる事は過去じゃない。

歩き出せ。

留まれば、そこには闇が待ち受けるのみ。

立ち向かえ。

恐怖におののけば、そこには死が待ち受けるだけ。

いつも、そうして来たじゃないか。

あの絶望の中で、そうして生きて来たじゃないか。

今、誰よりも信用できる私の勘が行けと言っているのだ。

それを信じなくて、何をしようと言っただ。

もはや、他に選択肢は無い。

新しい世界への切符を手し、静かに覚悟を決めた。

いざ、さらばだ……

私は生涯、この愛すべき時を忘れる事は無いだろう。

やがて洞窟を背に、未来へと歩き始めた。

第一章 完

第二十六節（後書き）

これにて、第一章が完結です。これまで読んで頂いた皆様、本当にありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1590y/>

生きるってさあ？

2011年11月26日20時55分発行